
D魂 神の使徒と侍

愛華蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D 魂 神の使徒と侍

【Nコード】

N 1 8 4 9 W

【作者名】

愛華蝶

【あらすじ】

天人と人との間に生まれた前原一志。彼を狙う黒い影が忍び寄っていた。その頃、突如歌舞伎町に現れた謎の四人組。彼らはエクソシストと名乗る者だった！彼らが連れてこられた理由とは一体…？

銀魂とD・Gray-manのコラボレーション。侍とエクソシスト達が今立ち上がる！

序章（前書き）

実はDグレそんなに詳しくありません。原作読んでないし、アニメもまちまちですし…。何かいろいろ間違ってたらすいません！

序章

『天人の血が混ざった子…』

『不吉…』

『呪われた子供…』

『こんな子がいてはいけない…』

『消せ』

『災いを呼ぶ前に…』

「……………うああッ…！」

ガバツ！

悪夢にうなされて、布団から飛び起きた前原は、額に滲んだ汗を拭いた。

（あれは夢…いや、俺の過去…）

隣を見ると、さっきの声は運良く聞こえていなかったらしく、桂と優羅がぐっすり眠っていた。奥には謎の生命体、エリザベスも寝て（？）いた。

布団から立ち上がり、羽織を着て外に出た前原は、月を見上げた。

「何かの前触れか…？」

眼帯を外している左目が、金色に輝いた。

序章（後書き）

前原「え？俺が最初？」

愛華蝶「今回の話は主にアンタをフューチャーするから」

前原「フューチャーの意味分かってんのか!？」

第1章 新人さんはお手柔らかに(前書き)

銀時「うおっしやあ！今回も行くぜー！」

愛華蝶「あ、ここからしばらくDグレだから、出番ないよ」

銀時「なっ…!!！」

第1章 新人さんはお手柔らかに

黒の教団本部。

ミランダ・ロットーが入団してきて2日。

「てめっ！モヤシ！俺の蕎麦の天ぷら返せ！！」

「ケチケチすんじゃないですよ神田。蕎麦の方も味見させてもらいましたけど、よくあんな味気ない物食べて戦えますよね。肉とか食べないんですか？」

「テメーには関係ないだろ！！返せ！！」

黒髪をポニーテールに結び上げた青年が白髪の少年を追いかけている。その後ろをついて行く眼帯をつけた赤髪の青年が、今にも腰の刀を抜きそうなポニーテールの青年、神田をなだめる。

「まーまーユウ。落ち着くさ」

「引っ込んでろバカウサギ！」

毎度おなじみになってきた、アレンと神田の喧嘩である。それを止めるラビも段々慣れてきたのか、はたまた面白がっているのか、真面目に止める気はない。すると、前方からツインテールの少女が歩いてきた。

「もー。また喧嘩してるの？」

少女…リナリーが現れたことで、刀から手を離れた神田だが、不満は隠せない。

「このモヤシが俺の天ぷらとつたから悪いんだよ」

「何子供みたいな事言ってるんですかパツツンが」

「ンだと!!」

「はいはいもうおしまい! ったく…ラビも一緒にいるんだったら喧嘩止めてよ」

「だってこの2人の喧嘩、見てたら面白いんさ」

バカ3人を相手にして、リナリーは大きなため息をつく。4人で仲良く(?) 室長室に行くと、何だか人だかりができています。科学班のメンバーだ。

「あれ? みんな集まって、どうしたんですか?」

アレンが聞くと、コムイが振り返った。

「実は、ティエドール元帥の紹介で来たって子がいてね…」

4人がモニターを見ると、門番の前に人が立っている。神田と同じ黒く長い髪を首の後ろで束ねている。前髪が長く、顎まであるので、顔がよく見えない。

「元帥から紹介状はきてないの?」

「リナリー、聞いても無駄だよ…」

なんせコムイのデスクの上は、書類だらけで、部屋も足の踏み場がほとんどない。

「今探してもらってるんだ」

コムイが指さした先には、必死に書類をかき分けるジョニーとタツ

ブが。

「自分で探しなさい！」

「ゲフツ！！」

リナリーに蹴飛ばされて書類の山に突っ込んだコムイは、「あったあ！！」と言つて起き上がった。

「すごいさりナリー！ビンゴさー！」

「で？手紙には何て？」

感心するラビを無視して、リナリーは手紙の内容をせかす。

「えつとね、近々そつちにタイちゃんって子を行かせるからよろしく』…だつて」

「タイちゃん？てことは女の子ですか？」

アレンが聞くと、コムイはうぐんと唸った。

「多分、女の子かな？」

「書いてないんさ？」

「うん。国籍は日本らしいんだけど…」

「じゃあユウと同じさ」

今までずっと黙っていた神田だったが、日本人と聞いて、何を思ったか室長室から出て行くこととしていた。

「どこ行くんですか？神田」

「暇だからあいつ連れてくる」

その言葉を聞いて、部屋にいた全員が驚愕した。

「ユウ、どこかで頭でもぶつけたさ？」

「熱でもあるんですか…？」

「暇だからって言っただろ」

そう言い残すと、そのまま室長室を後にした。

「あつ！神田待つて！」

そのすぐ後をリナリーが追いかけていった。

「神田1人に任せてたら、何しでかすか分かりませんからね…」

「それにしても、ユウが任務以外で自主的に動くなんて珍しくね？」

「やっぱり、国籍が同じだからですかね…」

しばらくして室長室に連れてこられた人物は、可愛い顔立ちをしていた。前髪で隠れてはいるが、顔立ちからしてアレンと同年ぐらい。

「テイエドール元帥から紹介を受けて来ました。本城ほんじょう党たいです。宜しくお願いします」

ぺこりとお辞儀をした黛を、アレンは珍しそうに見ていた。

「モニターで見たときとイメージ違いますね」

隣のラビに耳打ちをしたが、ラビは…。

「ストライク！」

落ちた。

「俺ラビって言うんさ！よろしくタイちゃん！」

隼の手を握り、モロにアピールするラビに、隼はきょとんとしている。

「タイちゃん…？」

ようやく口を開いた。

「…あの…元帥が間違えたまま手紙に書いたのかもしれないけど

…」

「僕男です」

「………え？」

うわあああああああ！！！！！！

教団中に悲鳴が響き渡ったけど、当たり前だよな。

第1章 新人さんはお手柔らかに（後書き）

愛華蝶「オリキャラのデータは活動報告でまた書きます。あと、オリキャラのイメージCDと、OP、EDも出そうと思います」

ラビ「何ですか？」

愛華蝶「何か面白そうだから」

第2章 年齢って顔だけじゃわからない(前書き)

前原「ところで、何で新オリキャラもロングヘアーなのだ？まさか白鬼族ではないだろうな？」

愛華蝶「何でDグレで白鬼族引つ張るんだよ。違いよ。黛の髪型は面倒だから俺からとっただけ」

前原「前髪長いんだな…」

愛華蝶「学校でちょっとした噂になってるよ。鬼太郎みたいって」

前原「鬼太郎って…お前女だよな？」

愛華蝶「そっだよ？女子高通ってるし」

第2章 年齢って顔だけじゃわからない

「はあ…」

黛が大きいため息をついた。ヘブラスカの所に連れていかれた黛は、放心状態で帰ってきた。よほどショックが大きかったのだろう。

「まあ初めてヘブラスカを見たら、誰でも驚きますよね」
「そのうち慣れてくるさ」

アレンとラビに励まされながら、黛は食堂に向かっていた。

「あ、神田」

食堂では神田がいつものように蕎麦を食べていた。

「さつき食べてたのにまだ食べるんさ？ユウ」
「さつきモヤシのせいでまともに食べなかったから、食いなおして
るだけだ」

黛を連れて注文をしに行ったアレンは、もの凄い量の食べ物を持って帰ってきた。

「アレンも、さつき食ったばかりなのにそんなに食べるんさ!？」
「蕎麦だけじゃ味気なくて」

その隣には、井の乗ったお盆を持ってアレンを驚きの眼差しで見る黛がいた。

「タイちゃんは何頼んだんさ？」

「月見うどんです」

薫の丼の中を見せてもらうと、白くて太い麺が汁に浸かっていた。その上にはネギや半熟卵も。

「お蕎麦ですか？僕も好きです」

神田の蕎麦を見て、薫が呟く。

「そう言えば、自己紹介まだでしたね。僕はアレン・ウォーカーです」

「俺は…ってもう言ったか。ラビっす」

「アレンくんは、ラビ…さん？」

頑なになる薫に、ラビが言う。

「ラビでいいさ。ところで、タイちゃんは歳いくつさ？」

「18です」

「18か。そーかそーか…」

「は…!?18!?!?」

「は、はい…。何か？」

薫の見た目はどう見てもアレンと同じかそれよりも下。しかし実際の年齢はラビや神田と同じ18歳。

「ありえない…」

驚きを隠せない2人をよそに、黛はうどんをおいしそうにすすっていた。

「おいしい…」

すると、4人の所にジョニーがメジャーを持って近づいてきた。

「本城黛くんだったっけ？採寸してもいいかな？」

「採寸？」

首を傾げる黛に、アレンが説明する。

「ジョニーは黒の教団の団服を作っているんです」

「ああそれで」

「君には神田と同じようなロングコートはちょっと似合わないかな？じゃあ思い切ってミニスカートに…」

「ちよっ！ミニスカートって！黛は男ですよ！！」

アレンとジョニーのやりとりを見て、黛は笑っていた。その顔を見て、ラビは

『やっぱり女の子にしか見えないさ…』

と思っていた。

第2章 年齢って顔だけじゃわからない(後書き)

愛華蝶「団服どうしようかな…」

アレン「カッコカワイイボーイッシュ系！」

リナリー「やっぱりフリル系？」

ラビ「ジョニーも言ってたミニスカート!!」

神田「ロングスカート…?」

黛「だから僕男ですってば!!」

全員「似合うから問題ない!」

黛「そんなあ」

第3章 たまには違う服を着ると印象が変わるけど、実はそうでもなかったりする

アレン「何か前回の話、ラビと黛のBLっぽくなかったですか？」

愛華蝶「別にそんな風に書いたつもりはないんだけど……」

ラビ「タイちゃんなら大歓迎さ！」

黛「ユウさん、コムイさん、助けてー!!」

第3章 たまには違う服を着ると印象が変わるけど、実はそうでもなかったりする

次の日。黛の団服が出来上がった。

「早いね…」

「これが黛の団服だよ。早速着てみてよ」

ジヨニーに渡された団服を持って自室に入った黛は、上着を持ったまま固まってしまった。

キィ…

「あれ？着ないんですか？」

「あの…すいません…コレ、どうやって着るんですか？今まで着物しか着たことなくて…」

確かに、入団してきたときも、黛は日本の民族衣装の着物を着ていた。そりゃ分かるわけがない。

「貸せ」

神田が黛から上着を取り「ここに腕を通して…」と説明する。

「ありがとうございます！ユウさん」

神田にお礼を言って自室に入っていく。

「ユウさん…？」

アレンとラビが同時に言う。

「うわぁ！すっごく似合ってます！」

黛が着てきた団服は襟が高く、上まできっちり閉めているので、顎まで隠れている。太いベルトに、丈の短いコートで、ミニスカートっぽくなっている。ズボンにロングブーツで…。

「何か完全防備さ…」

ラビがボソツと呟く。

「おー、よく似合ってるねー」

声が出た方を向くと、コムイとリナリーがいた。

「じゃっ、早速で悪いけど…任務だ」

任務、という言葉聞いてアレン達に緊張が走る。

「黛くんは初めての任務だね。アレンくん、ラビ、リナリー、神田くんと一緒に、ニシナ湖へ向かってもらいたい」

「ニシナ湖…？」

アレンが訊くと、リナリーが答えた。

「ニシナ湖に調査に向かったファインダーが、まだ帰ってこないの。イノセンスの可能性もあるけど、AKUMAの可能性も高いわ」

「AKUMA…」

世界を終焉へと導く千年伯爵が作り出した闇の兵器。悲しみの産物
…。

「分かりました。すぐ行きます」

「…これは!!」

ニシナ湖に着いたアレン達の目に飛び込んで来たのは、おぞましい
光景だった。

「あら、こんにちは。エクソシストさん」

挨拶をしてきた女性はとても綺麗な笑顔だったが、その手には血の
ついたファインダーの服が。

「レベル2のAKUMAか…」

素早く神田が自分のイノセンス、六幻に手をかける。ラビも槌を構
える。

「人を…食べたんですか…!?!」

「どうやらそのようですね」

「あなた達も彼等と同じようにしてあげるわ!!」

そう言って飛びかかってきたAKUMAに、神田が容赦なく刃を向
ける。

「六幻。災厄招来…」

六幻の刀身が鋭く光る。

「界蟲：『一幻』！」

刀身から無数の何かが飛び出して、AKUMAに襲いかかる。

「大槌小槌…満、満、満…！」

ラビの持つ槌がみるみるうちに大きくなり、そのまま槌を振り下ろす。

「やったか？」

あたりに土煙が舞、AKUMAの姿が見えなくなる。

ギョルツ…！」

「うわっ…！」

「ぐっ…！」

突然土煙の中から何かが飛び出し、神田とラビに絡みつく。

「神田！ラビ…！」

「イノセンス、発動…！」

すかさずリナリーがイノセンスを解放する。

「円舞『霧風』…！」

途端に、その場に竜巻が起こり、土煙が晴れてAKUMAが姿を現す。両腕を伸ばして神田とラビを捕らえている。

「2人をはなせ!!」

黛が叫ぶと、AKUMAはあざ笑うかのように話し始めた。

「こいつらには私と同じ苦しみを与えてやるの。私と同じ…苦しみを!!」

「あなたの苦しみ？」

「…私は生まれつき病気で脚がなかった。友達と走り回ることも、自転車に乗ることも出来なかった。そればかりか、みんなは私を見て化け物と囁くようになった」

特異体質であるがための差別。

「耐えられなくなった私は自殺をした。そして、私の母が千年伯爵と出会った」

「そこでああなたのお母さんは、あなたを蘇らせようとした…。そして、『あなた』が生まれた」

そこまで話すと、AKUMAは両腕の力を更に強くした。

「ぐあっ!!」

「こいつらにも、同じ苦しみを!!」

「やめる!!」

ヒュンッ!!

アレンが叫んだ途端、何かがアレンの頬をかすめた。それは一直線にAKUMAに向かって飛んでいく、氷柱だった。

「 ！」

アレンが振り向くと、イノセンスであろう弓を構えた がいた。氷柱は、両腕が使えないAKUMAの胸に突き刺さった。

「うああっ！！」

その場に崩れ落ちたAKUMAは、そのまま灰となって消えた。

「安らかに…」

アレンはそう呟くと、AKUMAから解放されたラビが声をかける。

「アレン！！早く帰るさー！」

「はい！」

アレンがみんなの所へ駆け出そうとした、その時。

「何さ！！コレ！？」

突然アレン、ラビ、神田、 の足元に、光がほとばしった。

「みんな！！」

リナリーがアレンの手を取ろうとした瞬間、4人全員が消えた。

「うそ…」

ニシナ湖のほとりに、リナリーが1人残された。

第3章 たまには違う服を着ると印象が変わるけど、実はそうでもなかったりする

黛を門の前まで向かえに行った神田とリナリー。

リナリー「初めまして。私は室長秘書のリナリー・リー。こっちは神田ユウ」

黛「リナリーさんと、ユウさんですか。本城黛です。宜しくお願いします」

神田「ユツ…！」

リナリー「……！」

神田「ユウって呼ぶな…！」

黛「何ですか？ユウさん」

何故か逆らえなかった神田だった…。

第4章 イヤな夢は他人に話すといいらしい(前書き)

銀時「やっと銀魂のターン！」

愛華蝶「今回の話は場面がコロツコロ変わります」

優羅「ちゃんとして来いよ！」

愛華蝶「銀魂の世界の時期は、歌舞伎町四天王篇、『丁か半か』のすぐ後ぐらいです」

第4章 イヤな夢は他人に話すといらしい

「第九師団？」

春雨の母船、第四師団団長、神威と副団長、阿伏兔の会話である。

「知らねえか？天人一頭のキレる、白鬼族の集団だ」

「へえー。で？それがどうしたの？」

「理由は分らんが、奴等が地球に行くって聞いたもんでな」

「地球…？」

その言葉を聞いて、神威の反応が変わった。

「…ねえ阿伏兔。俺達も連れてってもらおうか…。ね、」

「地球の喧嘩師さん」

場所は変わって、こちらは攘夷党のアジト。

「どう思う？小太郎」

「どうと訊かれてもな…」

前原が、桂に昨夜見た夢の話をしていた。

「昨夜だけじゃない。一昨日の夜も、その前の夜も、同じ夢を見て
いるんだ」

「ただの思い過ごしだと思っがな…。お前達はどっ思っ？」

桂がそう言うのと、優羅とエリザベスがそれぞれ答える。

「いち心配性だからな。思い過ごしだと思っ」

『でも、何日も同じ夢を見るのは、マレですよね』

ただの夢なのか、それとも何かの前兆か…。前原は不安を押さえきれなかった。

「定春うー！散歩行くアルよー！」

「ワン！」

万事屋では、神楽が愛犬定春の散歩に行こうと準備をしていた。

「神楽ちゃん、気をつけてね！」

「分かってるアルよ！」

新八の忠告に元気よく返事をする、万事屋を飛び出していった。

「何か心配です…。神楽ちゃんが定春の散歩に行きたんびに心配です」

新八がうなだれていると、銀時がやる気のない声で呟いた。

「もし事故つて神楽が警察に連行されたら、責任者としてお前が行つてこいよ」

「何で僕なんですか!?!」

「定春! 待つアル!?!」

定春と追いかけてっこをして遊んでいると…。

ドンツ!!

定春が何かを跳ね飛ばした。

「大丈夫アルか!?!」

神楽は飛ばされた人に駆け寄った。そこに倒れていたのは、ポニーテールの青年だった。

第4章 イヤな夢は他人に話すといいらしい(後書き)

前原「ちなみに俺のイメージJCVは櫻井孝宏さん」

優羅「俺は高山みなみさん！」

黛「僕は釘宮理恵さんです」

愛華蝶「これは覚えておいた方がいいですよ。本編でネタにするんで」

第5章 どこか出掛けるときはちゃんとお家の人に行き先を告げなさい（前書き）

新八「定春が跳ね飛ばした人って誰ですか!？」

愛華蝶「多分、読者の人ほとんど分かってると思うよ」

第5章 どこか出掛けるときはちゃんとお家の人に行き先を告げなさい

空が光り、そこから人影が現れた。

「げふっ！」

「うっ！」

「ぐっ！」

「イタッ！」

落ちてきた人影がラビ、神田、アレン、黛の順に折り重なった。

「いたた…一体何が…」

「どけっ！モヤシ！」

「アレンです！」

「死ぬ〜！」

ラビが叫んだことで、4人は立ち上がる。辺りを見渡すとそこは、さっきまでいたニシナ湖のほとりではなかった。

「どこですか？ここ」

アレンが聞くと、黛が答えた。

「ここは…日本…？」

「日本って、黛の住んでた国か！？」

ラビが聞くと、黛は首を横に振った。

「僕が住んでいた国に、あんなモノは無かったし、あんな生物もい

ませんでした」

黛はターミナルや天人を指して言う。そんなアレン達を変な眼差しで見る人々。人目を避けるため、4人は路地裏に入っていく。

「一体何があったんさ…。さっきまでニシナ湖にいたのに」

「ですよ。リナリーと一緒に…」

アレンがそこまで言ったとき、全員がハツとなる。

「そう言えばリナリーはどこ行ったんですか!？」

「あそこに置いてきたんでしょうか!！」

「大変さ!!! あれ?どこ行くんさ?ユウ」

アレン達がワタワタしている間に、神田はさっさとどこかに行こうとする。

「この近くにいるかも知れねえ。それから辺りを散策した方が、何か分かるかも知れない」

「あつ!待って下さいユウさん」

そう言って歩き出した神田の後を、黛がついて行こうとすると、目の前で神田が何かに跳ね飛ばされた。

「ユウさん!!!」

「神田!？」

神田の所に駆け寄った3人。頭を打ったらしく、気絶していた。神田を跳ね飛ばした物…それは、まるで白クマのような大きさのデカイ犬だった。

「AKUMAか!？」

「待って下さいラビ!」

とつさに槌を構えるラビだが、アレンが止める。

「大丈夫アルか!？」

白クマ(?)の後ろから、顔を出したのは、頭にぼんぼりを付けた、オレンジ色の髪の女の子だった。

「お前ら変なカツコアルな」

女の子が言った言葉に、若干ショックを受けた3人だが、女の子の服を見ると、リナリーがよく私服で着ているような服だった。

「…ねえ、1つ聞いてもいいかな？」

「何アルか？」

「ここの近くに、ニシナ湖っていう湖ある？」

アレンが聞くと、女の子は、

「にしなこ?何アルか、それ。ここは歌舞伎町アルよ」
と言った。

「歌舞伎町…!？」

「黛知ってるさ？」

「いえ、知りません…」

聞いたことない地名に、たじたじになる3人を見て、女の子はある提案を述べた。

「場所が分からないんだったら、お前らウチに来たらどうアルか？」
「えっ？いいんですか？」

アレンが聞くと、「困ったときはお互い様アル！」と言った。

「じゃあ、お願いします」

まだ気絶している神田をラビと黛が担いで歩き出す。

「そいやあ、まだ名前聞いてねーさ。何て名前だ？お前」

「私？神楽アルよ」

「神楽ですか。僕はアレン・ウォーカーです」

「俺はラビ。よろしくさ」

「僕は本城黛です。で、この気絶してる人が神田ユウさんです」

それぞれ自己紹介して、一行は神楽が案内する道を行った。

「兄さん！！コムイ兄さん！！」

黒の教団に帰って来るなり、室長室に飛び込んできたリナリーを見て、コムイは飲んでいたコーヒーを目の前の書類にぶちまけた。

「…やっぱりリナリーが入れたコーヒーの方がいいな」

「今はコーヒーはどうでもいい！！！」

ダンッ！とリナリーはデスクを叩いた。

「アレンくん達が消えちゃったの！！」

「何だつて！？」

ようやくただ事ではないと分かったようだ。

「4人の足元に白い光が出たと思ったら、みんな同時に……」

涙声で話すりナリーの頭を、コムイは優しく撫でた。

『コムイ室長ですね？』

「ッ！！！！」

突然、コムイの無線機に、聞いたことのない男の声が飛び込んできた。神田のゴーレムからだ。

「誰だ！！何で神田くんのゴーレムを……！！」

声を荒げているコムイに、男は静かな声で言った。

『落ち着いて下さい。4人のエクソシストさんは無事です』

その言葉を聞いて、一応は安心した2人だが、男に聞く。

「君は誰だ？千年伯爵の手先か？何が目的だ。4人は今どこにいる」

『フフツ。部下思いのいい室長さんですね。私は千年伯爵の手先でもノアでもありません。それだけは教えておきましょう』
「4人はどこにいる!?!」

明らかに蔑んだ相手の態度に臆することなく、コムイは聞く。

『言っても信じてもらえるかどうか分かりませんが…。あの4人は、今別の次元に行ってもらっています』
「別の…次元?」

何を言っているんだ…?

『正確には、貴方方の世界とは違う、我々の世界に来ていただいています』
「一体何のために…」

『我々の目的のために、少し協力していただくだけですよ』

男の声がワントーン低くなる。

「協力だと?」
『安心してください。手荒なことをするつもりはありません…彼等が何もしない限り』

コムイの額に、冷や汗が流れる。

『ではこれで』
「待て!」

男が通信を切ろうとしたが、コムイの声でその手を止める。

「君は…何者なんだ？」

『…私はあちらの世界では、春雨という名の組織の第九師団団長、命と申す者です』

それだけ言つと、男は通信を切つた。

「命…」

不穏な影が、動き始めた。

第5章 どこか出掛けるときはちゃんとお家の人に行き先を告げなさい（後書き

神楽「春雨からオリキャラが出てきたアル!!」

命「声だけの登場ですがね」

愛華蝶「また後々オリキャラ紹介するから」

桂「今回の話はオリキャラが続々出てくるらしいぞ」

前原「春雨第九師団…白鬼族…」

優羅「いち?どうした?顔が真っ青だぞ?」

第6章 『まんじや』ではありません。『よろずや』です（前書き）

命「私の登場はまだですか？つまらないですね」

愛華蝶「しびらく出ねーよ」

第6章 『まんじや』ではありません。『よろずや』です

「ここアルヨ！」

神楽に案内されて4人（1人氣絶）が来たのは、『スナックお登勢』と書かれた看板のお店。その看板の上にもう一つ、『万事屋』と書かれた看板が…。

「ま…まんじや？」

アレンがそう言うと、神楽が「違うアル!!」と言った。

「これは『よろずや』と読むアル!!お前は初めて銀魂のアフレコに来た声優アルか!？」

意味不明な事を言う神楽だが、そのすごい剣幕に圧倒される。

「コイツ、ジジイより怖いさ…」

「あまり怒らせない方が身のためですね…」

「ユウさんが起きたら、大変なことになりそうですね…」

ビクビクしながらまんじや…じゃなかった、万事屋に入ると、眼鏡をかけた少年が出迎えてくれた。

「おかえり、神楽ちゃん。…その人たちは？」

「定春が跳ね飛ばした人と、その連れアル！」

神楽が白クマを指して言う。

「何かついてくると思ったら、飼い犬だったんですね…」

「定春が人を跳ね飛ばした!? 大変だ! すぐ手当しないと!」

「あ、頭打って気絶してるだけだから大丈夫さ」

ラビがそう言うが、男の子は奥に布団を敷いて神田を寝かせた。

「頭が少し腫れてます。とりあえず冷やしておきましょう」

「ご丁寧にありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそすいません…あ、僕志村新八です」

「僕は本城黨。よろしく、新八くん」

黨と新八のやりとりを見て、アレンとラビが軽く自己紹介した後、神楽が思い出したように言う。

「そういえば新八、銀ちゃんはどうしたアルか？」

「銀さんなら、さっき前原さんが来て、話がしたいからって桂さんの家に行ったよ」

「いちが? 話って何アルか？」

「さあ…大事な話っぽかったけど」

「なあなあ、その銀さんって人、この人か？」

新八と神楽の会話を聞いて、ラビが首を突っ込む。

「銀ちゃんはこの万事屋のオーナーアル!」

「その万事屋って何なんですか？」

アレンが聞くと、新八が答えた。

「万事屋は、ここは万事…つまり、何でもする何でも屋っていう意味です」

「ま、普段仕事なくてゴロゴロしてるだけアルけどな」
「そうなんだ…」

その時、

バンツ！！

閉めていたはずの襖が開き、寝ていたはずの神田が鬼の形相で立っていた。その手には六幻が…。

「ユウさん！まだ寝てないとダメですよ！」

「うるせえ…」

黨の静止も聞かず、神田は定春を見て、ゆっくりと六幻を抜き放つ。

「イノセンス…発動」

「神田！！」

神田が六幻の刀身を指でなぞると、刃が銀色の光を帯び…ない。

「……………あれ？」

六幻は鞘から抜かれた時と同じ、黒い刀身のままだ。それを見たアレンは左手の手袋を外した。

「イノセンス、発動」

しかし、左手には何も起こらない。

「アレン！俺もさ！」

ラビの槌は伸縮はするが、火判などが使えない。

「イノセンスが…使えない…！？」
その頃

「何だ？話つて。わざわざ新八たちがいないところまで来て」

攘夷党、桂一派が潜伏する長屋で銀時が前原と桂に聞いた。

「まあ座れ。…実は最近、妙な噂を聞いてな」
「妙な噂？」

前原が聞いた情報によるとこうだ。

宇宙最強の海賊集団、『春雨』。その中でも最も最強と言われる、神楽の兄、神威率いる夜兎の戦闘部隊、第七師団が再び江戸に来るのではないかということだった。
春雨といえば、紅桜の一件で、高杉率いる鬼兵隊が手を組んで、後ろ盾を得て幕府を転覆させようと目論んでいた。

「つまり、奴らが江戸に来て世界を壊そうとしているとか？そう言うことか？」

銀時が聞くと、前原は「いや、」と言った。

「情報によると、どうやら付き添いで来るらしい。お忍びなのか、それとも何か他の目的があるのかも知れない」

「もしかしたら、俺達に火の粉が降るかもしれない。：銀時、お前も」

桂が銀時を指さす。吉原で初めて会った神威は、去り際に「俺に殺されるまで死んじゃダメだよ」と言っていた。高杉だっていつ襲ってくるか分からない。

「それはご忠告どうも」

そう言い残すと、銀時は帰っていった。

帰り際、屋根の上から怪しい人影がじつと銀時を見ていた。

「あれが坂田銀時…白夜叉。今回の計画には使えそうにないな。消しておいても問題はないだろう」

そう言うと、屋根から飛び降り姿を消した。

第6章 『まんじや』ではありません。『よろずや』です（後書き）

愛華蝶「先言つときます！今回多分出ますよ！高杉！！」

命「ちなみに私のイメージは…」

愛華蝶「まだ声だけのくせにでしゃばんな！！」（飛び蹴り）

命「ぐふっ！！」

愛華蝶「コメント、質問どしどし送って下さい！自分ウサギさんな
んで！！」

第7章 郷に入っては郷に従え（前書き）

愛華蝶「今週の土曜日は体育祭です！」

銀時「どうだっていいよんなこたあ」

愛華蝶「劇場版銀魂の主題歌、バクチ・ダンサー流すよ!!」

銀魂一同「おおっ!!」

愛華蝶「DグレOP4の激動流すよ!!」

Dグレ一同「おおっ!!」

第7章 郷に入っては郷に従え

銀時が万事屋に帰ると、神楽と新八と、見知らぬ少年達が4人…。

「ただいま…って、誰だコイツ等」

銀時が帰って来て第一声がこれだった。

「おかえり銀ちゃん！コイツ等はエクソシストのアレン達アル」

「お邪魔してます」

アレンが挨拶をすると、銀時はなぜかアレンに親しみを覚えた。

「…お互い大変だな」

「はい？」

突然手を握ってきた銀時を、アレンは不思議そうな目で見ていた。一通り自己紹介を終わらせた後、アレンはエクソシストとしての役目や、イノセンス、千年伯爵、AKUMAのことを話し、ニシナ湖で起きた現象について話し始めた。

「急に足元が光ったと思ったたら、ここに落ちてきたんです」

「で、その神田ってのが散歩中の定春に跳ね飛ばされたと…」

チラツと銀時に見られた神楽は申し訳なさそうに「すまなかったアル…」と言った。

「いいんですよ。ってというか、むしろ頭打って少しは性格変わればよかったのに」

「何だと、モヤシ。その白髪根こそぎ刈るぞ」

「アレンです。出来るもんならやってみて下さい。今は六幻もただの棒ですからね」

「ちよっと、喧嘩しないで下さい2人とも」

「仲良くするさ」

4人の会話を聞いていた銀時は、ある違和感を覚えた。

「何か、黛の声って神楽に似てるな。ラビは総悟くんで、神田クンはいち？」

「あ、それ僕も思っていました」

銀時の言葉を聞いて新八が拳手する。

「不思議なコトもあるもんネ」

「その総悟って奴に合ってみたいさ！」

神楽とラビがはしゃいでいると、新八が「あの〜」と言って入ってきた。

「それより、アレンさん達の服この世界じゃちよっと変ですよ。着替えたらどうですか？服貸しますから」

4人は一度考えた後、アレンが

「じゃあ、お願いします」

と言ったので、一同は新八の家に向かった。

「…どうしましょうか？」

新八が困り果てた顔で振り返った。

新八の服を貸すとは言ったものの、サイズが合つのが若干背の近いアレンしかないのだ。

「ユウモラビも黛も長身アルからな」

「オイテメエ、ユウって呼ぶな」

「銀さん他の着物とか持ってないんですか？」

「ねーな。この着流しだけだぜ」

とりあえずアレンだけ新八の服を貸してもらい、着せてもらった。水色の着流しだ。

「アレンくん似合うね」

「そうですか？あまりこういうの着たこと無いから…」

黛がほめると、アレンは照れくさそうに言った。

「しゃーねえ。3人の服はどっかで買ってくか」

「そのついでにいろいろ見てみたいさー！」

と言うわけで、全員で服を買つついでにいろいろ見て回ることにした。

「あら新ちゃん。そちらは？」
「姉上！」

商店街を歩いていると、新八の姉、お妙とその幼なじみの九兵衛に出会った。

「不思議な格好をしているな…。一体どこの者だ？」
「えっと…この人達は」

「外国から旅行に来たヤツ等アル！」

新八が口を濁らせていると、神楽が即座に言った。

「外国から来たばかりで、分からないことだらけだから万事屋に来て案内してくれって頼まれたアル！」

「あら、そうなの。今何もないんですけど、良かったらコレもらつて下さい。つまらないんですけど、私が作ったんです」

そう言つて、お妙は持っていた袋を渡してきた。

『私が作ったんです』の言葉で、銀時と新八から一気に血の気がなくなつた。

「食べ物ですか？ありがとうございます！！」

アレンが嬉しそうに袋を受け取った。

「よかつたな〜アレン」

「…よ、よかつたね」

苦笑いしか出来ない銀時だった。

お妙からもらった袋を持って一行が次に向かったのは、地下都市吉原桃源郷。

「銀時。久しぶりじゃな」

「ツツキー！」

煙管をふかしながら町を見回るのは、吉原自警団百華のリーダー、月詠だった。月詠を見たラビは、当然のごとく目がハートになる。

「ストライク！！モロタイプさ！！」

「ラビ落ち着いて下さい！黛が引いてます！！」

ラビに女と間違われてストライクと言われた黛は、あれからラビがちよっと苦手になってる。神田は町を見渡しながら神楽に聞いた。

「オイ。ここは一体どういう所なんだ？」

「ここは、女が男から金を巻き上げる所ネ」

「巻き上げる…？巻き上げて何を…」

「うわあああ！それ以上は無垢な子は聞いちゃダメですよウさん
！」

神楽が神田にイケナイコトを教えそうなので、慌てて黛が神田の両耳を塞ぐ。

「ちょうどよかった。少し銀時に話があつてな」

「話？何の話だ」

「ここじゃ何だ。日輪の所へ行こう」

「やったあ！お団子食べ放題アル！」

「え！！お団子ですか？みたらし団子ありますか？」

日輪の茶屋に着くと、アレンと神楽が団子の早食い競争を始めた。

「2人とももつとゆっくり食べなよ」

晴太が呆れながらその光景を眺める。

「で、話つて何だ？」

「うむ。近々春雨がまた江戸に来るということは知っているか？」

「あー、何か知り合いがそんな事言つてた。何か第七師団が来るだの何だの」

「その事で、少し気になることがあつてな」

月詠が煙管の煙を吐き出す。

「：第七師団と一緒に来るのが、第九師団というものらしいんじゃない」
「第九師団…？」

「どうやら、その第九師団は白鬼族という種族の天人で成り立っている、春雨の頭脳とも呼ばれておるらしい」

『白鬼族』と聞いて、銀時の表情が変わった。

「一体何のために…！」
「そこまでは情報が入っておらん。確か、ぬしの知り合いが人間と白鬼族の血を継いでいたと思つてな。一応

耳に入れておいた方がいいと思ったんじゃない
「そうか…ありがとな」

前原に聞いたときはなぜまた地球に来るのか、目的が分からなかったが、来るのが白鬼族と聞いて、嫌な予感がした。

『まさか、いちに何かあるんじゃない…』

にぎやかな神楽とアレン達の隣で、銀時は不安を募らせていた。

第7章 郷に入っては郷に従え（後書き）

アレン「今回はラビが何回『ストライク』って言うか数えるのも見方の一つですね」

桂「次回は俺も出るぞ」

愛華蝶「いや、まあ中心は桂一派だからね…出ないと困るよ?」

第8章 友達の家泊まるう(前書き)

愛華蝶「この小説のOPはUVERworldの『激動』かな？」

神楽「何でアルか？」

愛華蝶「歌詞的にこれからの展開に合ってるから」

第8章 友達の家泊まる

着物を買って万事屋に帰ってきた一行は、早速3人の着付けに取りかかった。

神田は黒い着流し、ラビはオレンジ色の着流し、黛は抹茶色の着物に白い袴姿になった。

「みんな似合うアル！」

神楽がそう言うと、ラビが着物の裾を持って呟く。

「何か足元がスースーするさ」

「だから袴にした方がいって言ったのに…」

そんな事を言っていると、いきなり窓が割れる音とともに、人が数人飛び込んできた。

「桂さん！前原さん！」

飛び込んできた人物は、桂と前原。その後から猫姿の優羅も入ってくる。

「すまん銀時。かくまってくれ」

「かくまってくれただあ？調子乗ってんじゃねーよテメー。人ん家の窓壊しやがって、バカなの？死にたいの？」

銀時が桂の胸ぐらを掴んで前後にガクガク揺さぶった。

「そう言うな銀時。実は貴様が帰ったすぐ後に真選組にアジトを襲

われてな。アジトには俺たち3人しかいなかったから、必死でここまで逃げて来たわけだ。俺が調べておいたありとあらゆる裏道を通って、誰にも見つかることなく来たんだ。むしろほめてくれ」

「誰がそんなモンほめるか!!?!」か長ロング解説どうも!!?!」

長ロング解説をする前原の声を聞いて、黛が「あつ!!?!」と声を上げる。

「前原さんの声、ユウさんに似てます!!?!」

「ホントだ!うわあ、神田が2人いるみたい…!」

「何が言いたいんだ?」

火花を散らすアレンと神田を見る前原はきよんとしている。

「ところで銀時。コイツ等は誰だ?仕事の依頼主か?」

前原の肩に飛び乗った優羅がアレン達を見て聞いてきた。

「うわっ!!猫がしゃべった!」

「何だこいつは…!!?!」

アレンと神田が驚いていると、新八が説明する。

「この子は優羅ちゃんって名前で、化猫族っていう天人なんです」

「あまんとって何さ?」

「天人は、簡単に言えば宇宙人みたいなものです。神楽ちゃんも、天人なんですよ」

「へ〜。こつちの世界には不思議なモノがいるんですね〜」

「おい!俺の質問に答えるよ!!?!メガネ叩き壊すぞ!!?!」

新八がラビと黛との話に盛り上がったことで、優羅がふてくされてしまう。

「ふむ…別の世界から来た…か」

話を聞いた桂が、顎に手をやりながら呟く。

「あくまで憶測ですけどね。ニシナ湖なんて池、ここら辺じゃ聞かないし、第一アレンさん達が着ていた服も見たことがありません…」

「確かに聞いたことのない話ばかりだったしな。ところで、エクソシストのイノセンスという物を見せてはもらえないだろうか」

何気なくそう言った前原の言葉でアレン達の表情が曇る。

「何でかは分からないんですけど、こつちの世界じゃイノセンスが使えないみたいなんです…」

「世界の時空とかが関係してるんですかね…」

「チツ！六幻が使えねえんじゃ、戦えねえな」

3人がそんな事を言っていると、不憫に思った桂が口を開いた。

「…もしよかったら、知り合いに言って刀を用意してもらえませんが…？」

「他人の刀を使う気にはなれねえな」

せつかくの桂の気遣いに対して、神田は聞き入れようとしなない。

「そんなわがママを言うとは、まだガキだな」
「何だと…?」

前原のその言葉に神田は前原を睨みつける。

「まあ貴様の気持ちも分からなくもないんだがな。使い慣れていない刀を持つのは、少々抵抗がある。だが、見知らぬ土地で丸腰というのも不安だからな。俺なら素直に受け取る」

「だから何が言いたいんだ？刻むぞテメエ」

「血の気の多い奴だ。どうするんだ？刀を受け取るのか、受け取らないのか。丸腰で殺られたらみつともないぞ」

嘲笑する前原に対して、頭にきたのかムキになった神田がいきなり立ち上がる。

「受け取ればいいんだろ!? 受け取ってやるよ!」

「あ、ヤケになった」

「あいつ、あのユウを言い負かしたさ」

「強敵現る…ですね」

前原を尊敬の眼差しで見つめる3人の横で、神楽がぼそりと一言。

「声が似てるから独り言言ってるみたいに聞こえるネ」

「というわけで銀時」

「何がというわけでだ」

「俺達はしばらく住むところがない。ここにいさせてもらえないだろうか」

そう言った桂の顔面に、銀時の放った飛び蹴りが綺麗に決まる。

「ふざけんじゃねーぞテメー！こつちは異世界から来ただの何だの言うガキ共までメンドー見なきゃいけねーんだ！テメー等なんかに構ってられるか！..!」

「..え？僕たちここにいていいんですか？」

銀時が言った言葉に、アレンが疑問をもつ。

「じゃーねーだろ？帰れるまで面倒見てやるよ」

その言葉を聞いて、アレン達の顔に笑顔が浮かぶ。

「ありがとうございます！！こんな見ず知らずの僕たちを受け入れてくれるなんて、本当に嬉しいです！！」

銀時の手を握って感動する薫を見て、銀時だけでなく、ラビや桂達までキュンとしてしまう。

『か..かわいい..アレ？何考えてんの俺？相手は男だぞ？いくら銀さんでもそんな事はないない!!..!』

『ストライク..。ほんっと、男なのが勿体ないさ..!..!』

『可愛すぎる..!これはもう、おなごでよいのではないか?』

『アレ？何か鼻血が出てきた..。何考えてんだ僕は!!..!!僕にはお通ちゃんがいるじゃないかああ!!..!』

「いち。あいつ等何してんだ？」

「放っておけ。馬鹿が伝染るぞ」

「何やってんですかラビは全く...」

「付き合いきれん…」

「アホの巣窟アル」

馬鹿4人を呆れた様子で見る神楽達であった…。

第8章 友達の家泊まるう(後書き)

ロード「ねーえ千年公。僕達も小説に出たいよ」

千年伯爵「それは作者が決めることです」

デビット「いつそ脅すか？」

ジャステロ「ヒヒッ！おもしろそー！」

愛華蝶「…ノアのみなさんの登場は前向きに考え中です…」

第9章 溜息をつく和幸福が逃げる（前書き）

神楽「作者の好きなキャラ」

優羅「大発表〜!!」

神楽「今回の小説の前書きは銀魂の好きなキャラと、後書きはDグレの好きなキャラをそれぞれ上位3人を発表するアル！」

優羅「それでは銀魂の好きなキャラ発表!!」

愛華蝶「1位は桂さん、2位は高杉さん。3位は同率で坂本と山崎です！」

神楽「さすが攘夷好きアル」

銀時「俺がいねええ！」

第9章 溜息をつくると幸せが逃げる

「…本当に大丈夫ですか？」

荷物をまとめながら心配そうに聞く新八。その理由はアレン達に加え、桂達まで万事屋に泊まると言うからだ。

「しゃーねーだろ。他に泊まるとこねーし、テメーの家に泊めたら確実に死人が出る（ダークマターの影響で）」

「そりゃあそうですけど…何も無理して桂さん達まで泊めることないんじゃないですか？」

「新ハイ。お前困ってる俺達を無碍にあしらうつもりか？俺達に野宿しろってのか？つたくこれだからメガネは…」

「どういう意味だ！！全国のメガネっ子に謝れ！！」

溜息をつきながら言う優羅に対してブチ切れる新八は、改めて銀時に向き直る。

「銀さん！追い出しましょう！！何も無理して泊めることありませんよ！！」

「それは困る！優羅、謝れ！！」

新八の言葉にワタワタする桂。その様子を小さい溜息をつきながら眺める前原。

銀時が桂達を泊めることにした理由は、月詠が言っていたことが気になっていたので。

『第九師団は白鬼族という種族の天人で成り立っている…』

『もしも白鬼族の目的がいちだったら…』

最初は考え過ぎかと思ったが、小さい頃から幕府や天人から狙われ
てきた前原なら、あり得ない話ではない。

「どうした、銀時」

「うおわっ！！」

いきなり顔をのぞき込んできた前原に驚いてしまう。

「おっ、驚かすんじゃないやねーよバカ！！…っっていうか新八は？」

いつの間にかさっきまでいたはずの新八がいない。

「貴様が何やら考え込んでる間に帰ってしまったぞ」

それより…と奥の部屋をのぞくと、エクソシスト4人組が自分の対
アクマ武器を手に盛大に溜息をついていた。

「はあ~~~~~」

「大丈夫アルよ。対なんたら武器がなくてもこの世界では生きてい
けるアル」

「余程シヨックが大きかったのだろうか…」

なんだか見てて気の毒になってきた銀時は、元気つけるように言っ
た。

「よっしオメー等、好きなモン言え！何でも食わしてやるよー！」

その言葉を聞いて、アレンが一番に反応する。

「本当ですか！？じゃあ天津飯に、豚骨ラーメンに、オムライスに、カレーに、えーっと…」

「待て待てちよつと待て！！いくら何でも頼みすぎだ！！一つに絞れ！！」

「じゃあみたらし団子」

「おやつじゃねーか！！」

するとアレンに続いてラビや優羅達も口々に好きな食べ物を使う。

「俺は辛くなければ何でもいいさ！」

「カツオのたたき！」

「お寿司がいいです」

「蕎麦」

神田と桂が同時に同じものを言ったので、全員が驚く。

「貴様蕎麦が好きなのか？貴様とは分かり合えそうだ」

「…そうだな」

蕎麦同盟を組む馬鹿2人。

「ところで、いちは何が食いたいんだ？」

「俺か？」

しばらく考えた後、前原はボソツと。

「…チヨロコメント」

「だからそれはおやつだったってんだろーが！！」

夜の万事屋に銀時のツッコミが炸裂した。

月に照らされた河川敷に、光がほとばしる。その光の中から小さな女の子とシルクハットを被った大柄な男が現れた。

「ねーえ千年公。ホントに後からテイキ達も来るのお？」

「来ますヨ。彼等も凄く来たがってましたからネ。でもその前に例の人に会わないといけませんヨ。ロード」

それを聞くと、女の子はフフツと笑った。

「早く会ってみたいな。『侍』ってのに」

第9章 溜息をつくとき幸せが逃げる（後書き）

ラビ「後書きはDグレの好きなキャラ発表さ！」

愛華蝶「Dグレは1位が神田。2位がデビット。3位が同率でラビと千年公」

デビット「よっしゃあ！俺ランクイン！」

ロード「千年公も入ってるよ〜」

アレン「僕がいないんですけどおおー！」

第10章 人がいなくなったらとりあえずその場で待機（前書き）

神楽「作者誕生日おめでとアル！」

愛華蝶「ありがとー！」

来島「ちなみに今日は武市先輩も誕生日ッスよ」

全員「オエエエッ！！」

第10章 人がいなくなったらとりあえずその場で待機

ガバツ！

「…まただ…」

肩で息をしながら前原は呟いた。時計を見ると、深夜1時。

日増しにリアリティを増していく夢の中の記憶。自分の幼い頃の姿…。両親…。

もう忘れたはずだった。忘れたかった。

「…父上、母上…」

「いーちー！」

「うぐっ！…！」

優羅が寝ている前原に飛び乗ってくる。外を見るともう朝だ。

「げぶっ…もっ、もうちょっとまともな起こし方はないのか…？」

「この方が早いじゃん」

「寝覚め最悪だ…」

目をこすりながら起き上がると、ちょうど桂が洗面所から出てきたところだった。

「おはよう、一志」

「おはよう」

前原と桂はリビングで寝ていたのだが、まだ銀時は寝ているようだ。

「顔を洗ってきたらどうだ？先客がいるかな」

「先客？」

誰かと思いながら洗面所に行くと、黛がタオルで顔を拭きながら振り返った。

「あ、前原さん。おはようございます」

「黛か。おはよう。早いんだな」

「いえ、ユウさんの方が早いですよ。もう起きてどこか行っちゃいましたもん」

「知らない土地で何やってんだあの馬鹿は……」

前原が呆れていると、玄関の方から物音が聞こえた。神田が帰ってきたのだ。

「ユウさんお帰りなさい！」

「どこに行っていたんだ？こんな時間に」

前原が聞くと、神田は素っ気なく「広場」とだけ言った。

「多分素振りだと思います」

神田の手元を見ると、なんと銀時の洞爺湖木刀が……！

「おまつ！まさかその木刀で素振りしてたのか！？」

「それがどうした？そこに置いてあったから使わせてもらった」

神田の天然ぶりに前原は思わず頭を抱える。

「…銀時には言つなよ」

それだけ言つと銀時が寝ている部屋に向かう。予想通り、銀時はまだ寝ていた。

銀時の部屋にはアレン達も寝ていたが、神田と黛がもう起きているので、部屋で寝てたのは銀時とアレンとラビの3人だけだった。

「オイコラ天パ起きろ」

「ん〜、母ちゃんもうちよい寝かせるよ〜」

「誰が母ちゃんだ！！て言つか貴様に母ちゃんはいたのか！？」

母ちゃんと言われた前原は一気にブチ切れて、銀時の耳を引っ張る。

「いでででで！！バカ！！離せよ！！千切れる千切れる！！」

ようやく全員を起こし終わったところで新八がやってくる。

「…銀さんどうしたんですか？その耳。真っ赤ですよ？」

朝食中に新八が銀時に聞いてきた。

「その眼帯さんが耳引っ張ってきたんだよ」

「銀さん。眼帯さんって2人いるんですけど？」

新八が前原とラビを見ながら呟く。

「いちに決まってるんだろ！？コイツマシな起こし方しやがらねえ」
「さっさと起きればそんな事にはならん」

言いながら前原は味噌汁を啜る。

「ごちそうさま！」

元気よく言ったアレンと神楽。この2人、ご飯を十杯もおかわりしていた。

「よく食べるな〜2人とも。育ち盛り？」

優羅が食後のお茶を飲みながら言った。

「さてと、俺はしばらく出るぞ」

「どこ行くんさ？」

ラビが立ち上がり出かけようとする前原に聞いてきた。

「俺は一応テロリストの情報屋だ。情報を集めに行くのと、新しい住処も見つけねばな」

「だったら俺も行く！」

優羅がついて行くことになると、前原が一言。

「お前は来なくていい。足手まといだ」

そう言い残すと、前原は出て行ってしまった。

「…最後の一言はよけいな…」

「いつもいちは一言余計に多いアル」

ターミナルのフロント。人や天人が多い中、一際目立つ一団がいた。

「ちょっとティッキー。ネクタイ歪んでる」

ゴスロリ系な可愛らしい服を着たロードが、黒髪の天然パーマのテイキ・ミツクのネクタイを引っ張る。

「いーだろこれくらい」

「よくない！今日は大事な人と会う約束してるんだから！ねー。千年公」

「そうですヨ」

ロードは隣にいる千年伯爵に声をかける。

「って言うかさー、何かオレら変な目で見られてね？」

パンク系の服を着た黒髪の少年、デビットが呟く。

千年伯爵は天人と似たり寄ったりなので違和感がさほど無いが、その周りにいる4人は完全に怪しい目で見られている。

「ちゃんと人間の姿ノーマルなのによ」

「姿じゃなくて、格好に問題があるんじゃない？」

ロードがデビットをからかうように笑う。

「ンだよそれ！！」

「ところでお前、もう1人どうしたよ」

ティキの言葉でようやくデビットは双子のかたわれ、ジャステロがないことに気づく。

「ホントだ！！ったくどこいったんだよあのバカ！！」

「ちよつと、どこ行くの」

「ジャステロ探しに行くんだよ！！」

ロードが止める間もなくデビットは走って行ってしまった。

だがロードは知っていた。さっき、ジャステロがトイレに行くと言っていたことを。

「もー、バカはどっちだよ」

口を尖らせながらぼやくロードを千年伯爵がなだめる。

「まあまあ、観光ついでに行かせてあげましよう」

すると、遠くの方でこっちに向かって左手を振る人物が。その右手には『ノアのみなさん』と書かれたボード。

「…何アレ。現地スタッフ？」

テイキが呆れた様子で呟くが、千年伯爵が、

「あの人です」

と言う。

「え…まさかあの変な人が大切な人？」

あり得ないといった感じで見ていると、その人物がこっちに走ってきた。

「はじめまして。私は春雨第九師団団長、命と申します」

一見花魁のような姿の女は、にっこりと笑って挨拶した。

「…まったくどこいったんだよあのバカ…」

デビットは町をあちこち搜したが、一向にジャステロが見つかる気配はない。

公園のベンチに座っていると、数人の若者が声をかけてきた。

「お前、見慣れねえカッコしてんな。どこのモンだ」

おそらくリーダーであろう男がデビットに話しかける。

「あ？関係ねえだろ。こっちは人捜ししてんだよ。邪魔だからどっか行け」

デビットのその言葉が男の怒りを誘う。

「テメエ！！なめた口利いてんじゃねーぞガキが！！」

「…今日は何の情報もなしか」

前原は屋根の上から町を見下ろしながら、チョココメントアイスを食べていた。

アイスの棒をくわえたままその場にしゃがんでいる。

「何もないし、今日は帰るか…ん？」

前原の目が公園の光景を見つける。

「…何やってんだ？アイスら。喧嘩か？」

しかし、見ていてどうも様子がおかしい。

「…アイツ1人か」

前原は屋根から飛び降りて公園に向かう。

さすがにヤバかった。

千年伯爵に「この世界の人間に対してノアの力を使うな」と言われていたけど、そもそもジャステロがいないんじゃないかと戦えやしない。

デビットはそう思いながら男達とやり合っていた。いや、やり合っていたと言うよりも、一方的にやられていた。

「死ねやあッ!!」

やられる。

リーダーの男が拳を上げた時、覚悟して目を閉じた。

いつまでたっても衝撃が来ないので、恐る恐る目を開けると、男の拳が目の前に突然現れた長髪の男に止められている。

「1人相手に随分と大人数だな」

第10章 人がいなくなったらとりあえずその場で待機（後書き）

愛華蝶「誕生日プレゼントは今話題の3DSだよ！カセットはレイトン！！！」

桂「否、ゲームと言えばファミコンだろうか？」

愛華蝶「チヨイスが古い！！！」

第11章 喧嘩は二対一でやれ(前書き)

愛華蝶「作者誕生日記念短編、公開中です」

銀時「公開中って、まるで映画みたいだな」

愛華蝶「その日、全米が泣いた」

《h a c h i》

銀時「イヤなんか違う!」

第11章 喧嘩は二対一でやれ

「なっ、何だデメエ!!」

予期せぬ乱入者、前原に男は驚く。

「喧嘩は二対一でやるもんだろ?しかもこんな子供をよつてたかって…恥ずかしくないのか?」

前原は男の拳を掴んだまま淡々と話す。

「うるせえ!!部外者は引つ込んでろ!!」

男は掴まれていない左手で前原に殴りかかったが、あっさりかわされる。

「まだそんな元気があるんだ…なっ!!」

ボキッ!!

言った瞬間、前原は掴んでいた男の拳を砕いた。骨の折れる音が公園に響く。

「うわああああ!!」

拳を砕かれた男は地面をのたうち回る。

「なっ、何だコイツ!!」

「ヤベエよ!逃げる!!」

周りにいた男達は、倒れている男を抱えて逃げていった。

「フン。不良が」

そう言う前原はテロリストなのだが…。

「……………」

今までの光景を唾然として見ていたデビットは、しゃがみ込んだままだった。

前原が振り返ってデビットに近づく。

「大丈夫か？ホラ」

そう言って差し出された右手を掴んで、デビットはやっとのことで立ち上がり、礼を言う。

「あの…ありがとう…」

「この辺はああいう輩が多いんだ。気をつけるよ」

そう言ってふと前原を見ると、デビットの腕から血が出ていた。

「怪我をしている」

「え？あ、ああ。大丈夫だよ。ほっときやすぐ治る」

「そう言うわけにはいかん。すぐ手当せねば、傷口からばい菌が入って腕が一生使えんという場合もある」

明らかに大袈裟すぎる説明だが、デビットはそれを真に受ける。

「マジで！？ヤベエじゃん！！」
「ついて来い。手当てしてやる」

そんな話をしていると、前原の携帯に一通のメールが。
桂からだ。

《ちょっと皆と家を空けるぞ。鍵はお登勢殿に頼むといい》

「皆で…？」

あの大人数で一体どこに行くのかと思ったが、おそらくアレン達の町探検だろうと考えた。

お登勢から鍵をもらい、万事屋に入った前原は、デビットをソファ
ーに座らせ、すぐに救急箱を探す。

「銀時の性格だとこの辺にしまいそうなんだが…あ、あった」

手早く消毒をしてガーゼをあて、その上から包帯を巻く。

「出来たぞ」

「消毒液が染みて痛え」

デビットが包帯をさすりながら言う。

「それはそつだ。怪我してるんだからな」

そう言っただけでデビットを見る前原。

「…何だよ」

「いや、別に。ホントにガキだなと思って」

「んだよそれ！言っどくけどオレはこっに見えて17…ムグッ！」

激怒するデビットの口に何かが突っ込まれる。

「冷てっ！！」

「アイスだからな」

よくよく味わうと、それはチョコミントアイス。口の中にミントのさわやかな味が広がる。

「歯磨き粉みてえな味」

「何が歯磨き粉だ。チョコミント馬鹿にすると殺すぞ」

「ペナルティーが高えよ！！チョコミント馬鹿にしたぐらいで抹殺宣言！？」

「安心しろ。抹殺じゃない。惨殺だ」

「余計悪イわ！！安心できるか！！」

言い争いをしていて、前原があっ！と声を出す。

「そっか、ええまだ名前を聞いていなかったな。何という？」

「オレ？オレはデビットだけ…」

「デビットか…。俺は前原。前原一志だ」

自分の名前を教える前原を見て、今更ながらに、デビットは変な奴だと思った。

「なあ…お前はオレのこと変だとか思わないのか？」

デビットの質問にきょとんとする前原だったが、すぐに返事を言う。

「思ったぞ？変な奴だなあって」

「なっ…!!」

「けど、俺の周りには変な奴が多いから、そんなに珍しいものでもない」

「変な奴って、どんな奴がいるんだ？」

そうだな、と、数秒考えた後。

「糖尿病寸前の甘党ヤローだったり、小柄のくせに大食いの奴だったり、ツッコミメガネだったり、オバQもどき、猫娘、マヨラー、サディスティック星の王子、ゴリラストーカー、ミントンの王子様、DMメガネ、痔持ち忍者、歩く18禁、毛玉…」

「あの、もうその辺で」

「どんだけ変人が多いんだこの世界は。と思いながら溜息をつくデビット。」

「それと…」

「それと？」

前原が愛おしそうに呟く。

「馬鹿なんだけど、ものすごく芯がしっかりしてる奴」

「……………」
「そいつは俺を助けてくれた。だから、ずっと俺がそいつのこと護るって決めたんだ」

そう。この身が減ぶまで……ずっと……。

「お前はそいつのこと好きなのか？」

不意に聞いてきたデビットに対して、前原は思わず「は？」と声を出す。

「相手は男だぞ。俺はホモではない」

「えっ！あつ、悪イ！」

でもそういう話の時ってふつう女かと思うじゃん……とか何とかブツブツ言っていたら、あることを思い出す。

「あー！！ジャスデロ！！」

デビットの突然の大声に、前原はビクツとなる。

「オレ人捜ししてたんだよ！それに大事な人に会わなきゃならねーし……！」

「大事な人？それは大変だ。すぐに向かえ」

すぐさま玄関に向かい、戸に手をかけたところでデビットが振り返る。

「…また、会えるか？」

すると、前原は優しく笑って頷いた。

「あの公園のベンチで」

それを聞いたデビットは嬉しそうに出て行った。

数時間後、銀時やアレン達と、『馬鹿なんだけど、ものすごく芯が
しっかりしてる奴』が帰ってきた。

「おかえり。小太郎」

俺は、この人を護ると決めた。最期まで…。

第11章 喧嘩は二対一でやれ（後書き）

桂「『糖尿病寸前の甘党ヤロー』は銀時、『馬鹿なんだけど、ものすごく芯がしつかりしてる奴』は俺のこと、毛玉と歩く18禁は誰のことだ？」

愛華蝶「毛玉がさかもっさんで、歩く18禁が高杉さんだよ」

高杉「歩く18禁…」

神威「ねーねー俺は？」

愛華蝶「闘争本能の塊」

第12章 自分の手は汚さないヤツってサイテー（前書き）

ロード「今回はノアがメインだよ」

ティキ「どうでもいいけど何で千年公のセリフの最後に『ハート』
がつかねえの？」

愛華蝶「ハートマークつけようとするの？』？』しかないから、自立
つしウゼエ」

第12章 自分の手は汚さないヤツってサイテー

「デビ、どこ行ってたんだ？」

「それはこっちのセリフだバカデロ！！」

ターミナルに帰ってきたデビットが見たのは、千年伯爵達と、自分が必死に捜していたジャステロがカフェでお茶を飲んでいる場面だった。

「デロは、デビにトイレ行ってくつたけど？」

「デビットはぜんぜんジャステロの話聞いてなかったからね」

ロードがお菓子の袋を開けながら口を挟んできた。お菓子を自分の口に放り込む。

「ん〜っ！！オイシイ！コレ何てお菓子？」

「それはお饅頭です。薄皮の中にあんこなどを詰めた、日本の伝統の味です」

千年伯爵の前に座る女がロードの質問に答える。

「イヤイヤイヤヤ！！ちょっと待て！！」

慌ててデビットが止めに入る。

「今、作者が『女』って書いたけど、コイツ声からして明らかに男じゃねーか！！」

「あ、バレました？」

「バレました？じゃねーよ！！っーかコイツ誰だ！？大事な人はど

うしたんだよ千年公!！」

ギャーギャーわめくデビットに、女…ではなく男は深々とお辞儀する。

「申し遅れました。私は春雨第九師団団長、命と申します。今回千年公に依頼をした者です」

「つまり、この人が『大事な人』ってワケだ」

コーヒーを飲みながらティキが言う。

「えええええ!?!この変人が!?!嘘だろ!?!」

「早く座んなよデビット。この人アンタのためにずっと待っていてくれたんだから」

ロードがデビットの服を引っ張り、無理矢理座らせる。

「では、本題に」

そう言った命は、すつと片手を挙げた。すると、命の後ろから金髪の男が現れる。命と同じ長髪だ。

「第九師団副団長の縁えにしです。以後お見知り置きを」

金髪の男、縁が丁寧にお辞儀する。まるで命の執事みたいだ。

「縁えにしing。例の物を」

「命様、えにしんぐという呼び方はおやめ下さいと何度も言っているではありませんか」

そう言いながら縁ingは、

「作者、殺されたいんですか？」

申し訳ありません。縁は数枚の写真を取り出す。

「貴方方にはこの写真の人物を痛めつけてもらいたいです」

「ヒヒッ！殺しだ！」

ジャステロが興奮したように言うが、命がそれを遮る。

「殺してはいけません。あくまで痛めつけるだけです。方法はどんな方法でも構いません」

「ふうーん。おもしろそうだね。じゃあどいつがいいか選ばうよ」

ロードの提案に全員が納得する。

「じゃあボクはこの長髪。大人しそうな顔してるね」

「じゃあ俺はこの天パ。やる気なさそうだな…」

「ティキと一緒にじゃん。ボクこの包帯のヤツとも遊びたいな」

ロードがティキに毒舌を吐きながら一枚の写真を手にするが、命がその写真をすつと抜き取る。

「すみませんが、この人物はもう他の人に頼んであるんです。もう1人相手をしたいのでしたら、こちらをどうぞ」

命はさつきとは別の写真をロードに渡す。

「チエツ。まあいいか」

ロードはむくれながらも素直に写真を受け取った。

「じゃあオレらはこのグラスンってワケ？余りモンじゃねーか」

「コイツ弱そうだな。ヒヒッ」

「皆さんお決まりですか？」

命の言葉に全員頷く。

「ところデ…」

ここでやっと千年伯爵が口を出す。

「何でこの人達を痛めつけるんですか？何か目的でモ？」

「目的…そうですね」

命は、手を組んで顎を乗せて考える素振りを見せる。

「…ある人物を手に入れるため、とでも言っておきましょうか」

「ある人物…？」

意味がよく分からなかったが、命はそれ以上のことは教えてくれなかった。

「それから、もう一つ」

命が思い出したように言う。

「先ほど渡した写真の人物達以外は傷つけないことと、ロードさん。その長髪の男を私の元に連れてきてほしいんです」

「何でえ？」

「その男はとても重要なんです。好きに痛めつけて構いませんが、決して殺してはいけません。写真の裏に名前が書いてあるので確認しておいて下さい」

言われたとおり、写真を見ると名前が書いてあった。

ロードは桂小太郎と優羅

ジャスデビは坂本辰馬

ティキは坂田銀時

「では皆さん。よろしくお願いします」

命が懐から一枚の写真を取り出し、妖しく笑う。

「よつやく私の元」

そしてロード達に聞こえない小さな声で呟いた。

「もつすぐですよ…前原一志」

第12章 自分の手は汚さないヤツってサイテー（後書き）

その頃の万事屋：

銀時・桂・前原・優羅「ハックションンンン！！」

アレン「あれ？風邪ですか？」

神楽「うつすなヨ」

第13章 電話に出たらまず名乗れ（前書き）

神楽「今回遅かったアル」

愛華蝶「しめんね。レイトンに夢中で」

前原「作者は銀魂とレイトンのコラボも考えているらしい」

第13章 電話に出たらまず名乗れ

町案内を終えた銀時達が万事屋に帰ると、すでに前原が昼食を用意して待っていた。

「いち！帰ってたのか」

前原に置いてけぼりにされた優羅が嬉しそうに飛びついてくる。

「うおっ！おかえり。どうだった？町案内は」

飛びついてきた優羅を受け止めた前原はアレン達に聞いた。

「昨日も行ったんですけど、今日はまたいろんな物が見れました。桂さんに刀も用意してもらったし、これでいつ襲われても大丈夫です」

アレンの手に握られていたのは、青い柄と緑色の鞘の日本刀。神田は真っ黒なシンプルな刀だった。

「切れ味悪イけど、六幻が使えるねえんじゃ仕方ねえ。六幻はしばらくここに置かせてもらおう」

神田は不機嫌そうに部屋の隅に六幻を立てかける。

「僕は弓の方はそのまま使えるんで、矢だけもらってきました」

黛は肩に掛けた大量の矢を見せる。

「ったくよー、このウサギヤローがあちこち行きたがるから汗だくだっつーの」

銀時が胸元をパタパタさせながらぼやく。

「汗だくなところ悪いな。昼食はラーメンを用意させてもらった」
テーブルの上には、人数分のどんぶりが並べられていた。ほかほかと湯気が上る。

「やったあ！お腹ぺこぺこアル」

「ありがとうございます前原さん」

「早速食べるさー！」

神楽や新八達は嬉しそうにいただきますと言ってラーメンを啜り始めた。銀時は暑さより食欲らしく、しぶしぶ席につく。

「一志。俺達は蕎麦がいいのだが…」

桂が言いにくそうに神田と並んでいる。

「言つと思つたこの蕎麦同盟が。蕎麦組はコツチだ」

そう言つて2人の前に蕎麦を出すと、表情には出さないが、とても嬉しそうだった。余つた2人分のラーメンは神楽とアレンがおいしくいただきました。

「ところで、今日は何か変わったことはあつたか？一志」

桂が蕎麦を啜りながら聞いてきた。前原はデビットのことは言うほ

どのことでもないと思い、

「いや、今日は何もなかった」

と言った。

昼食を食べ終わって、一同がくつろいでいると、万事屋に一本の電話がかかってきた。

「はいはい、万事屋ですけどー？」

銀時が電話に出ると、陽気な声が返ってきた。

『金時イ！久しぶりじゃの〜』

ガツチャン！！

その声を聞いた瞬間、銀時は受話器を叩きつけるように電話を切った。

「どしたんさ？銀ちゃん」

「銀ちゃん？貴様等いつからそんな仲に…」

ラビの銀時に対する呼び方に驚く前原。

「何か電話の向こうから幻聴が聞こえた。気のせいだよな？気のせいだよなコレ？」

すると再び電話が鳴る。

「もしもし誰アルか？」

銀時の代わりに神楽が出た。

『おっ！その声は確か金時ンとこの娘さんか！！久しぶりじゃ〜』

神楽が受話器を置こうとする。

「ちよっとちよっと！！エンドレスに続くからやめなさい！僕が代わるから！」

新八が代わると、新八の予想通り、電話の相手は坂本辰馬だった。

「どうしたんですか？坂本さん。電話なんかしてきて」

『や、大した用じゃないんじやが、たまたま地球に戻る用ができてのお。暇ができたならそっちにも寄るかも知れんと思ったんじや』

「そうなんですか。是非来て下さいね！待ってますから！」

新八が明るく言うと、後ろで銀時が露骨に嫌そうな顔をする。

「おまつ、何勝手な事言っただよ。来ても何にもねーぞ」

「よいではないか銀時。昔馴染みと顔を合わせるのも久しぶりだからな。新八君、少し代わってくれぬか」

桂が新八と電話を代わって坂本と会話をする。

アレンが優羅に聞いてくる。

「坂本さんってどんな人なんですか？」

「辰馬は宇宙で天人相手に貿易をしてるんだ。だから地球に帰ってくることも滅多にないんだ」

「へ〜。坂本さんってすごい人なんですね！」

それを聞いてアレンが感心する。桂が電話を切ってソファに座ると、神田が桂に話しかけた。

「何を話してたんだ？」

「大したことはない。少し昔話をしただけだ」

少し目をそらして言う桂に、神田は眉をひそめた。

電話を切った坂本は桂にこう言われた。

『銀時から聞いたんだが、一志が狙われているかもしれん。もしかしたら俺達にも何かあるかもしれんから気をつける』

第13章 電話に出たらまず名乗れ（後書き）

愛華蝶「デビットの髪ってアシンメトリーかな？」

黛「えあ…どっでしょっ」

愛華蝶「後ろの髪は家庭教師ヒットマンリボンの骸みたいだなあ
と思った」

優羅「確かに」

神楽「似てるアル」

第14章 迷子は迷子センターへ（前書き）

愛華蝶「試験終わったぜ！！レイトンも全クリしたぜ！！」

神楽「これで小説に専念できるアルな」

愛華蝶「サイト開いたからそっちも頑張るぞ！」

桂「ほどほどにな……」

第14章 迷子は迷子センターへ

宇宙の片隅。真つ黒な空間にぼつりと浮かぶ船。中からは三味線を弾く音と、楽しげに話す声。

「ねえねえお待さんも行くつよ。俺だけじゃつまんないよ」
「何度も言ってるんだろつが。俺にまわりつくな。うぜえ」

高杉は自分にまわりつく神威に今にもキレそうだ。

「何で一緒に来てくれないのさ」
「しつげえな。何でダメエなんざと行かなきゃならねえんだ」
「一緒に来てくれないと殺しちゃうぞ」
「よく言つぜ。行っても行かねえでも同じだろうが」

その光景を眺める河上万斉と采島また子。

「あのガキ、何で晋助様につきまわってるんすか？晋助様迷惑がってるッス」

また子は高杉が今にもキレそうなのをハラハラしながら見ているが、万斉は興味なし。サングラスごしでは表情も分からない為、何を考えているのかも分からない。

「ちょっと先輩！なんか言うことないんすか？晋助も何か考えがあるかも」とか

また子は万斉に聞くが、やはり無反応。

「万斉先輩イイ！！！！！」

高杉がキレる前にとつとつまた子がキレてしまう。その声を聞いた万斉は。

「しまった。寝ていたのでござる」

「いや寝てたんスカ！？そりゃ無反応なはずッスよ！！いつから寝てたんスカ！！」

「確か『宇宙の片隅』辺りから記憶がないでござる」

「ほとんど最初っからじゃないッスカ！！何？何か徹夜でもしたんスカ？」

「お通殿の新曲を考えていたらなかなか思いつかず、気付いたら日が昇りはじめていたのでござる」

「鬼兵隊がらみじゃないんかい！支障きたすんならプロデューサー辞めちまえ！！」

寝不足プロデューサーにツッコミまくるまた子。その間にも神威は高杉をしつこく誘う。

「一緒に行かないなら、あの銀髪のお侍さん、俺が殺しちゃうよ？」

瞬間、高杉の目の色が変わる。

「あの白髪は俺の獲物だ。勝手に手エ出すんじゃないよ」

「じゃあ一緒に来てくれる？」

神威がにこりと笑う。

「上等だ。鬱陶しいのも離れて、銀髪も殺れるんだったら行ってや

らあ」

高杉も妖しく笑う。

「じゃあ決まり。さっそく行くところか」

侍の星に…。

次の日。前原は公園のベンチに座ってチョコミントを食べていた。

カチッ

耳元で拳銃を構える音が聞こえた。しかし前原は慌てる様子を見せない。

「玩具おもちゃだろう？悪ふざけはよせデビット」

すると後ろからふてくされた表情のデビットが出てきた。

「何でこれが玩具だって分かったんだよ」

「音で分かる。本物の拳銃は音がもつと重い」

「音だけで分かるってすげーな」

デビットは前原の隣に座りながら呟いた。

「昨日言っていた捜し人は見つかったか？」
「ああ。何とか」

2人がそんな他愛もない会話をしていると、ブランコの近くで小さな子供が俯いているのが見えた。

「…何だあのガキ。迷子か？」
「そのようだな」

そう言っただけで立ち上がった前原は子供に近寄って声をかける。

「どうした？迷子か？」

すると子供は俯いたまま頷いた。

「お友だちとあそんでたら、いつのまにかいなくなっちゃって…」
「そうか。じゃあ俺と一緒に捜してやろう。子供だからまだ近くに
いるだろう」

するとデビットが嫌そうな顔をする。

「えっ、メントクセー」
「そう言っただけでデビット。お前もどうせヒマだろう？」
「まあそうだけど、オレ昼までに帰らねーと…」
「昼までならいいんだろ？と言っただけで、一緒に友達を捜してやる」
「ほんとに？」

そう言っただけで顔を上げた子供の顔を見た前原とデビットの顔は恐怖に凍りついた。

その子供の顔は、真ん中に大きな目が1つだけついていた。

「ぎゃああああー!!」

公園に2人の悲鳴が響き渡った。

その頃万事屋には、1人の依頼者が来ていた。

「……………」

その依頼者は、顔の真ん中に大きな目を持った小さな子供だった。依頼の内容は連れがいなくなったので捜してほしいということだった。

「つーか、何さあの生物。天人なんさ？」

ラビが銀時に耳打ちで聞いてくるが、銀時は、

「知らない知らない! あんな天人見たことないイイイ!」

「顔の真ん中に目が1つつて、20世紀少年のトモダチみたいアル」

「目エ合わせるんじゃねーぞテメー等。アイツ等はおそらくトモダチ族という天人だ。ぎーんとーきくーん。あーそびーましょーとか言っつて仲間を増やしていくに違いねえ」

するとアレンがぼそりと一言。

「かーんーだくーん。あーそびーましょー」

「断る。ふざけんなモヤシ」

『やだなあ本気にしないで下さいよ。つまんないですね』

『デメエ刈るぞ』

『落ちて着け神田くん。今はそんな場合ではない』

『そうですよユウさん。落ちて着いて下さい』

アレンに斬りかかろうとする神田を黛と桂が押さえる。

「あちこち捜したんですけど、見つからなくて…。もう万事屋さん
に頼むしかないと思ったんです。お願いします！」

そう言っつて懇願する子供を見て、新八はなんだかかわいそうになっ
てきた。

「銀さん。捜してあげましょうよ。せつかくの依頼ですよ？」

「デメー！もし俺がこんな1つ目になってもいいっつーのか！？大
晦日の夜に強力な細菌ばらまくぞ！ブラッディ・ニューイヤーにな
るぞー！」

「ブラッディ・マンディみたいに言わないでください！」

いやがる銀時を全員でなだめたりすかしたりして、ようやく依頼を
引き受けたのは、それから30分後のことだった。

「おそらくこの種族はモノアイ族だと思う」

1つ目の子供を連れて歩く前原が呟く。

「モノアイ族？何だそれ」

「モノアイ族は、見ての通り目が1つしかない天人なんだ。普段は2人で行動をするんだが、はぐれるというのは初めて聞いた」
すると子供がデビットに向かって両手を出してきた。

「おんぶ」

「は？」

「じゃあだっこ」

「じゃあじゃねーよ！自分で歩け！！」

思わず拳銃を構えるデビット。しかし玩具なので脅しにしかならぬい。

「してやったらどつだ？おんぶくらい」

「ああ！？」

前原の言葉にデビットが驚く。

「ふざけんなよ！何でオレがんな事しなきゃならねーんだよ！！」

「貴様はこの子よりおにーさんだろ？」

「じゃあお前がすれればいいだろ！？オレはぜってーやらねーぞ！！」

わめくデビットに呆れながら、前原はその場にしゃがんで子供を背負う。

「チエツ、物好きなヤツ」

デビットが皮肉を呟く。

背中から子供の体温が伝わってくる。温かい体温。

「……………」

一度だけ、父親にしてもらったおんぶ。その背に耳をあてると、父の体温と鼓動が伝わってきた。生きてる証…体温と鼓動が…。

「…松陽先生にも、してもらったことがあるな」

思わず前原がそう呟くと、デビットにも聞こえたらしく、

「？何か言ったか？」

「いや、何でもない」

すると、前方から小さな子供がこちらに向かって走ってくるのが見えた。今、前原が背負っている子供そっくりの子供が。

「アイー！…！」

前方の子供がこちらに呼びかけると、背負った子供がすぐさま反応する。

「モノ！」

無表情で前原の背中から飛び降り、2人の子供がひしと抱き合う。1つ目なので、ただの妖怪絵図にしか見えない。

「心配したんだよアイ」

「モノは心配性だからね。ボクはだいじょうぶだよ」

その名前を聞きながら、デビットと前原は同じ事を考えていた。

「モノアイ族だから、モノとアイって…」

「おおざっぱ過ぎじゃねーか？」

「モノくーん！いきなり走らないでよー」

モノの後を追いかけてくる数人の先頭を走るのは…

「新八くん！」

「何？お前の知り合い？」

前原の後ろからデビットが見ると、新八の後ろを走ってくる白髪の少年が。その額には逆さペンタクルが刻まれていた。

(まさかあいつ、前にロードが言ってたエクソシストか！?)

以前ロードが言っていたことを思い出し、今はマズいと思い、路地裏を通って走って行った。

「あれ？前原さん。子供見つけてくれてたんですか？」

「ああ。公園で1人で見るところを見つけてな。コイツと一緒に…あれ？」

前原が後ろを見ると、今までいたはずのデビットがいない。

「どうしたんですか？」

アレンが聞いてくるが、前原は、

「大丈夫。何でもない」

と言っただけだった。

第14章 迷子は迷子センターへ（後書き）

愛華蝶「ちなみにモノアイ族の2人はどっちも男の子。髪型はモノくんがアシンメトリーで、アイくんがボブね」

銀時「誰が考えたんだんなもん」

愛華蝶「俺の友達」

第15章 人の言うことはちゃんと聞こう（前書き）

愛華蝶「明日から蓮蓬篇だあああああ！！」

桂「あの話がついにアニメ化か！」

銀時「てゆーか、何か早くね？だってやっとコミック発売になったばかりだぜ？」

愛華蝶「自分は早く桂さん、もとい、石田彰さんの『リングデイン
トン』が聴きたい！」

前原「音痴だけどな」

桂「グサツ！」

第15章 人の言うことはちゃんと聞こう

「オイ聞いてねーぞー!!」

ノアの一族と命達が滞在しているホテルの和室で、声を荒げながらデビットが言った。

「何のことですか？」

デビットの目の前では、命が優雅にお茶点てをしていた。

「とぼけんな!! オレさつき見たんだよ! ロードが前に話してた、白髪に逆さペンタクルのエクソシスト!! 何でこの世界にエクソシストがいるんだよ!!」

「えっ!? アレンがいるのー?」

アレンの事が大好きなロードがすぐさま反応する。

「彼らは今回の作戦にとっても重要なのです」

「重要…?」

「はい。そのためにわざわざ来ていただいたのです」

命は点てたお茶を千年伯爵の前に出す。千年伯爵はそれを受け取り口に運ぶ。(てゆーか、飲めるのか?)

「とてもおいしいお茶ですネ」

「お褒めいただき光栄です」

千年伯爵にお辞儀をして、命がデビットに向き直る。

「心配には及びません。彼らは今、イノセンスを所持している
ので」

「それってどう言うこと？」

ジャステロが聞くと、

「この世界には、イノセンスの源、ハートがありません。ですから、
イノセンスはこの世界では発動出来ないんです」

なるほど…と全員が頷く。

「ところで、皆さん任務はどうしたんですか？」

命が言ったその言葉で、全員が固まる。

「まさか任務も忘れて呑気に日本を楽しんでる…なんてことはな
いですよネ？」

につこりと笑う千年伯爵に、全員が額から滝のような汗を流す。

「今日の午前中、何をしてたのか聞かせてもらいましょうか？ま
ずはロードさんから」

名指しされたロードは、ビクツと肩を震わせ、

「ち…近くのお菓子屋さん…」

「満喫しまくってるじゃないですか」

ロードの顔に、命が投げた茶筌が当たる。

「テイキさんは？」

「お…オレは、近くの賭け事屋に…」

「こちらの世界に来て賭け事ですか」

テイキの顔に、命が投げた茶杓が当たる。

「ジャステロくんは？」

「ち…近くでドラゴンボール探し…」

「この世界にそんなモノはありません」

ジャステロの顔に、命が投げた茶托が当たる。

「デビットくんは？」

「……………」

「どうしました？早く言ってください。嘘偽りなく」

そう言う命は、手に茶漉しを構えている。

「ひ…人と会ってた！」

「人…ですか？」

命の表情が変わる。

「そつだよ！昨日会ったヤツなんだけど、今日も会えないかって聞いて、会ってたんだ」

「へ〜。デビットが人間に興味持つなんて珍しいね〜。ね、そいつってどんなヤツ？男？女？」

「うるせえな！男だよ！眼帯に長髪！」

それを聞いた命は驚いたような表情になる。

「デビットくん。お手数ですが、その人の名前は……」

「名前？確か前原一志とかって言ってたけど」

前原一志…まさに今、命が捜し求めている人物。

「くっ…ふふふ…」

やっと見つけた…そう思うと自然と笑いがこみ上げてきた。

「まさかこんな形で見つかるとは…」

午後。ジャステロとデビットは、坂本辰馬を狙って、ターミナルで待ち伏せをしていた。

「オイ大丈夫か？ジャステロ」

ジャステロは先ほどから命に茶托を投げ当てられた箇所をさすっている。

「ヒッ！デロはドラゴンボール探してただけなのに…！」

「まあ今回は探すのは止めよう。な」

泣きじゃくるジャステロをなだめるデビット。

『まさかこんな形で見つかるとは…』

(一志の名前言ったら、アイツあんな反応したけど、知り合いかなのか?)

そんなことを考えていると、デビットの目に1人の男が映る。

茶髪の天然パーマにサングラス。長いコートを着た長身の男が。

「デビ！アイツだ！」

「よし！行くぞジャステロ！」

「ほんだら陸奥、わしはちつくと出かけるきに」

坂本が陸奥にそう言い残すと、陸奥は、

「またキャバクラか？」

と聞いてきた。

「お前はわしがそれしか用がないと思うちゅうがか!？」

「違うがか？」

「金時達に会うてくるだけぜよ！」

そう言って坂本が前を向いた途端、足元に銃弾が撃ち込まれる。

「!!!!!!?」

「頭!」

「キヤアアア！」

辺りは騒然となり、人々が逃げ惑う。坂本はとっさに拳銃を構える。駆けつけた陸奥も同じように懐から拳銃を出した。

「アンタが坂本辰馬か」

人混みの中からこちらに歩いてきたのは、拳銃を持った2人組の男の子。ジャステロとデビットだった。

第15章 人の言うことはちゃんと聞こう（後書き）

ジャステロ「掴もうぜ！ドラゴンボール！」

愛華蝶「そんなに欲しいならあげるよ。ホラ」

ミカンに星のシール付けただけ。

ジャステロ「……………」

第16章 襲撃事件にご用心（前書き）

愛華蝶「来週の大河ドラマ、『江』がいよいよ大阪夏の陣！楽しみ
だなあー！」

桂「俺も観ているぞ！茶々殿が美しい！」

前原「人妻だからか？」

桂さんの好みは多分茶々だと思っ…。

第16章 襲撃事件にご用心

「こ…子供？」

目の前に現れた2人の男の子に、坂本は驚きを隠せない。

「貴様等、頭に何の用じゃ」

「用？そつだな…」

デビットがそう呟き、2人が拳銃を向けてくる。

「そこに突っ立ってる天パに天誅下しに来ました〜、ってとこかな
「？」

べえっと舌を出しながらふざけているような口調でデビットがそう言う。

「ふざけたことを…」

「ふざけてなんかないよ！ヒッ！」

「オレらこれでも大真面目なんだよ。つーことで、テメーにや何の恨みもねーが、こつちも人に頼まれてやってんだ。悪く思うなよ！」

そう言うや否や、2人は同時に坂本に向けて発砲した。それをかわした坂本は、床を転がりながら反撃をする。

「すっげー！さすが元攘夷志士」

デビットの言葉に、坂本が反応する。

「貴様何が目的じゃ！」

「だーかーらー、さつきも言っただろ？オレらは頼まれたただけだつてよー！」

「殺しはしないから安心しなよ！ヒッ！」

そう言つて2人が放つた銃弾が、坂本の左肩と右膝に命中する。

「うっ！」

坂本は短いうなり声をあげてその場に倒れ込む。

「頭！」

「これで終わりだ！！！」

デビットがそう言つて銃弾を放つた途端、坂本の前に女の子が立ちはだかり、銃弾を弾いた。

「何っ！？」

女の子が振り返つて、坂本に駆け寄る。

「辰馬、大丈夫か？」

「おんしゃ…優羅ちゃんがか？」

坂本の目の前に立ちはだかった人物は、優羅だった。

「何か嫌な予感がすると思つて来てみたら…来てよかった」

優羅が安心したのもつかの間、坂本の頭に何かかものすごい勢いで落ちてくる。

先ほど優羅が弾いた銃弾が、嫌な音を立てて坂本に当たり、その場に血の雨が降る。

「坂本おおお!!」

「頭ああ!!」

優羅と陸奥が倒れた坂本に駆け寄る。

「え?何?何があったの?何でアイツ倒れてんの?」

ワケが分からずその場に立ち尽くすジャステロとデビット。

「とっ、とりあえずオレらはこの辺でおさらばするぜ!」

「あつ!待てこの人殺し!」

「殺してねーし!!今の弾だって頭に当てるつもり無かったし!!原因お前だし!!」

そう言い残し、2人は去っていった。

モノアイ族の2人を無事に会わせることができた一同は、まっすぐ万事屋に帰ってきた。

「天人つていろんなんがいて面白いさ」

「でもちよつと恐いですね。さっきのモノアイ族みたいに」

ラビと黛がそんな話をしている中、前原と桂は優羅の安否を気にし

ていた。

「アイツどこに行ったんだ…。心配かけて」

「きつとすぐ帰ってくるアルよ」

すると、万事屋の黒電話が鳴りだした。

「誰でしょうか？」

「また依頼かなあ？僕出ますよ」

「いやいい。俺が出る」

新八よりも先に、すぐそばにいた銀時が受話器をとる。

「はいはいもしもしー？…何だ優羅じゃねーか。早く帰って来いよ。

いちとツラが心配して…え？」

銀時の目が大きく見開かれる。

「辰馬が襲われた…！？」

第16章 襲撃事件にご用心（後書き）

今日はハロウィンと言つことので…。

優羅「トリック・オア・トリート！いちいお菓子ちよーだい！」

前原「やらん。むしろ俺がチョココメント欲しい」

銀時「トリック・オア・トリートオオオ！！ツラアアア糖分をくれ
エエエ！！！」

桂「断る！！！」

第17章 二者択一ってどういう意味だっけ？（前書き）

銀時「そう言えば、前話の優羅が銃弾を弾いたって、どうやって弾いたんだ？」

優羅「バットでカキーンと！」

銀時「……………」（汗）

第17章 二者択一ってどういう意味だっけ？

全治1ヶ月。それが坂本に下された診断結果だった。

「ごめん辰馬…」

「おんしは悪くはないきに。悪いのは部下のわしじゃ…」

辰馬のベットを挟んでしょぼくれる優羅と陸奥。

「2人共元気出すぜよ。いつつも明るい優羅ちゃんと毒舌の部下がおらんと、治るもんも治らんぜよ」

「でも…」

なくさめる坂本に、更に申し訳ない気持ちがかみ上げてくる。

「辰馬ツ！！」

聞き覚えのある声に振り向くと、病室の入り口に銀時が立っていた。その後ろには神楽に新八、桂と前原もいた。

「おー、金時イ！元気しちよったか？」

坂本は銀時に無邪気な笑みを向ける。

「元気してたかじゃねーだろーが。バカ」

「心配かけおつて…」

銀時と桂は苦々しそうな顔で坂本を見た。

「襲われたって、誰に襲われたアルか？」

神楽がそう聞くと、坂本の代わりに陸奥が教えてくれた。

「子供だったのお。拳銃を持った2人組じゃ」

「新八と同じか、年上くらいだったぞ」

陸奥に続いて優羅がそう言い、それを聞いた前原は、デビットと同じくらいだと思った。

「やはり、白鬼族と何か関係があるのだろうか……」

桂がそう呟いた。

「小太郎…それはどういうことだ」

前原にそう聞かれ、前原には内緒にしようと思っていた桂は、はっとなつて思わず口をおさえる。

「この事には白鬼族が絡んでいるのか？どうなんだ小太郎！」

前原は複雑な表情で問いかけてくる。

「そうですヨ」

突然声がしたかと思うと、病室に見慣れない男が立っていた。

でっぷりと太った体型に歯がむき出しのつり上がった口、鋭く尖った耳、頭に被ったシルクハット。

「こんばんハ。我輩は千年伯爵と申します」

「いや、こんばんはつつつても、まだ昼過ぎだけどな」

冷静にツッコむ銀時を無視して、千年伯爵は話を続ける。

「前原一志さん。これは警告です。あなたの大事なお友達を傷つけたくなければ、我輩と一緒に来てください」

「何だと…!?!?」

前原は眉をひそめ、千年伯爵を睨みつける。

「さもなければ、我輩の部下達がお友達を狙ってくることになりま
すヨ」「それは…誰かに頼まれたことなのか？」

前原がそう聞くと、千年伯爵は「ハイ」と答えた。

「つまり、貴様の上はまだ黒幕がいると？」

「ハイ。さアどうしますカ？お友達を危険に曝すカ、我輩と一緒に
来るカ」

「断る」

そう言ったのは、前原ではなく、桂だった。

「一志は俺達の仲間だ。貴様等などには渡しはしない」

「小太郎…」

「そーだそーだ。なめんじゃねーぞこのデブが」

「もしそいつ等が来ても返り討ちにしてやるアル！」

銀時と神楽の言葉を聞き、千年伯爵は少し溜息をつく。

「仲間を護るため…です力…」

そう言うと、千年伯爵は窓に手をかけ、重たそうな身体をよいしよと持ち上げた。

「それでは仕方ありませんネ。くれぐれもお気をつけテ」

そして、そのまま窓から飛び降りた。

「えええええ！！ちよっ、ここ5階ですよ！！！」

慌てて新八が窓に身を乗り出すが、千年伯爵の姿はなかった。

「何だアイツ…」

優羅がぼそりと呟いた後、前原が不安げな表情を向けてきた。

「小太郎…よかったのか？俺がアイツについて行けば、お前達を危

険に曝すことは…」

すると、前原の言葉を遮り、銀時が前原の頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜる。

「ちよつ、何をする…！」

「ばーか。余計な心配してんじゃねーよ。俺らがあんな奴等に負けるかっつーの」

「いやしかし…！」

なおも言葉を続けようとする前原を、桂や優羅達も笑顔で「心配ない」と言った。

その後、前原は桂から白鬼族の事を聞き、千年伯爵と第九師団はおそらく組んでいるであろうと話した。

その頃、万事屋の前に1人の男が来ていた。

男は、長い髪をなびかせ万事屋に近づいていった。

第17章 二者択一ってどういう意味だっけ？（後書き）

新八「えええええ！！ここ5階ですよ！！」

銀時「何言ってるんだ新八。ここは1階だぜ？」

嘘です

第18章 お母さんが帰ってくるまで玄関の鍵を開けないこと（前書き）

愛華蝶「今サイトで前原くんたちの絵を公開中です！URLはこちら！

<http://id3.fm.jp/372/enisising/>

D魂の漫画版も公開しようかと考えています！
遊びに来てね！」

銀時「まさかの宣伝！？」

第18章 お母さんが帰ってくるまで玄関の鍵を開けないこと

銀時達が病院に行っている間、アレン達4人組は万事屋でお留守番をしていた。

「坂本さん大丈夫でしょうか…」

黛が不安そうに言う。

「きっと大丈夫さ！銀ちゃんだってそう言ってる？」

「いつそんな事言っちゃったか？銀時さん」

「うるさいなあアレン！元気づける為さ！」

アレンとラビがギャーギャー言い合ってる横で、神田は何だか難しそうな顔をしている。それに気づいた黛が、神田の隣に座る。

「ユウさん。どうしたんですか？そんな怖い顔して」

「黛、神田は元々そういう顔ですよ」

「いやそうじゃなくて」

すると神田が小さな声で言う。

「気になる」

「何がですか？」

「襲撃事件の事だ。坂田から話を聞いたんだが、坂本は攘夷戦争の間はその強さから化け物のようだったそうだ」

「それがどうしたんですか？」

「そんな強いヤツがそんな簡単にやられるかと思ったただけだ」

「そりゃあもの凄く強い相手が来たらやられるんじゃないですか？」

すると、一緒にお留守番をしていた定春が急に玄関に向かって吠えだした。

「ワン！ワン！」

「どうしたんさ？定春。誰か来たんさ？」

ラビが玄関を開けると、いきなり目の前に刀が振り下ろされた。

「うああああー！！！」

玄関から聞こえた突然の悲鳴に一同は驚いた。

「ラビ！？どうしたんですか！！ラビ！？」

返事の代わりに、部屋に男が入ってきた。

長い金髪につり目がちの金色の目。右手には血に濡れた刀、左手には血まみれのラビを引きずっている。

「まず1体……」

男はラビを目の前に放り出すと、懐から小指ほどの小さなガラス瓶を取り出し、刀についた血を瓶いっぱいに入れた。そして刀に残った血を布で丁寧に拭き取る。

「ラビ！！しっかりして下さい！！」

アレンが倒れているラビを揺さぶるが、反応はない。

「テメエ誰だ！！！」

神田がためらいなく刀を抜き放つ。黛も弓、三日月を構える。男はその2人を人殺しのような目で見つめる。

「私は縁。春雨第九師団副団長。今日の目的はエクソシスト4人分の血を手に入れること」

縁は、ラビの血が入った小瓶を懐にしまうと、新しい小瓶を3つ取り出した。

「そんなモノを集めて一体何をするつもりだ！」

アレンが刀を抜きながら聞くと、縁は無表情で答えた。

「貴様には関係のないことだ」

その途端、まるで瞬間移動をしたかのように、縁は黛の前に立った。

「くっ…!!」

「遅い」

一瞬反応が遅れた黛は、三日月を構えようとしたが、間に合わず、縁の刀が黛の右肩から左脇腹にかけて鋭く線を描き、紅い華を咲かせる。

「かはっ…!!」

「黛ッッ!!」

アレンと神田が黛に駆け寄ったときには、すでに黛の意識はなかった。

「2体目…」

縁が先ほどと同じように小瓶に血を入れる。

「デメエ…!!」

神田が怒りをあらわにして縁を睨みつける。

「あと2体か…」

縁は刀の血を布で拭き取りながらぼそりと呟き、その刀をアレンと神田の2人に向ける。

「さあ、どつちが先だ…?」

しばらくして万事屋から出てきた縁の手には、赤黒い血の入った小瓶が4つ握られていた。

「上出来でしたよ。縁ing」

縁が振り返ると、そこには命がいた。

「これがエクソシストの血ですか…」

縁から血の入った小瓶を受け取り、妖しい笑みを浮かべる。

「準備は着々と進んでいますね？」

「はい。計画通りに」

それを聞いた命は、浮かべていた笑みをさらに濃くする。

「あと少し…あと少しでこの手に…」

一陣の冷たい風が、2人の長い髪を揺らした。

第18章 お母さんが帰ってくるまで玄関の鍵を開けないこと（後書き）

縁「命様、えにしんぐと言う呼び方はお止め下さい」

優羅「縁iningって横文字弱いのか？」

縁「失礼な。そんな事はありません」

命「何言ってるんですか。この間『ノンステップバス』の事を『ノンストップバス』って言ってたくせに」

縁「命様！！」

第19章 血の臭いは鉄の臭い（前書き）

愛華蝶「やゝつと文化祭終わったよ」

神楽「何やったアルか？」

愛華蝶「クラスの模擬店はお化け屋敷やったよ」

桂「楽しかったか？」

愛華蝶「まあそれなりに」

桂「それなりに…？」

第19章 血の臭いは鉄の臭い

「じゃあ、また来るからな」

病院の出口まで送ってくれた陸奥に片手を挙げて立ち去ろうとする銀時。

「ああ。お前らも気をつけるぜよ」

陸奥に忠告を受け、全員が頷き、その場を後にする。

「そう言えば、あのデブ千年伯爵って言ってたアル」

「アレンさん達が言っていましたね。何でアレンさん達の世界の人がコッチにいるんですかね」

「それについても調べなきゃいけないな」

帰り道での神楽、新八、優羅の会話を上の空で聞きながら、前原は千年伯爵の言葉を思い出していた。

『あなたの大事なお友達を傷つけないでください』

自分が言うことを聞けば銀時達が傷つくことはない。

『貴様等などに渡しはしない』

「……………」

駄目だ。

俺が奴等について行けば、『また』何をされるか分からない。俺が

ついで行ったとしても、小太郎達を襲うかもしれない。それに、どんな奴等が襲ってきたとしても俺が…。

「一志」

不意に声をかけられ、前原が顔を上げると、桂が両手で前原の頬を包んだ。

「そんなに思い詰めるな。俺達は大丈夫だから」

にっこりと笑って言う桂。その笑顔は前原の心を少しだけ和らげた。

(暖かい…)

桂から伝わってくる体温は、優しい暖かさだった。

万事屋に帰って新八が戸を開けると、奥から微かに香る血の臭いが鼻をついた。

「何で血の臭いがするんだ…?」

優羅が呟いたとき、銀時は既にブーツを脱ぎ捨て、中に入っていた。リビングの襖を開けると、そこにはおぞましい光景が広がっていた。

「…っ…これはっ…!!」

部屋のあちこちに紅い血が飛び散った痕がこびりつき、その臭いが部屋中に充満していた。

そして床には、アレン達が血まみれで倒れていた。

「一体何が……!!」

「アレン！オイしっかりしろ！」

銀時が倒れているアレンを揺さぶると、アレンはうつすらと目を開けて銀時を見る。

「あ……銀時……さん……」

「これは一体何があつたんだ？」

桂が聞くと、アレンはぼんやりとした表情で答えた。

「……分かりません」

「は……？」

「銀時さん達が病院に行つてから、留守番をしていたら誰かが来たんです。で、ラビが出たんですけど……そこから先の記憶が無くて……」

神田やラビ、黛にも聞いてみたが、答えは同じだった。ラビが玄関を開けて、そこからの記憶がない……。

しかも妙なことに、部屋のあちこちに血が飛び散った痕があるにもかかわらず、アレン達には傷一つついていないのだ。

「傷もない記憶もない……じゃあこの部屋中の血の痕は何なんだ……」

優羅が呟くと、神楽が顎に手をやりながら考える素振りを見せる。

「何かあつたことは確かアル。記憶を消されたって事もあり得るネ」

「何か今日の神楽ちゃんも随分冴えてるね」

「今日の私は名探偵神楽アル。早く詳しい調査をしたまえワトソン」

くん」「僕はアンタの部下かああああ!!」

新八が神楽に激しいツツコミを入れる。

ふと前原に目をやると、前原はソファに座り込んで俯いていた。その身体は小刻みに震えている。

「いち?どした?」

優羅が顔をのぞき込むと、その顔は恐怖に怯え、汗が吹き出し、真っ青になっていた。

「俺のせいだ…アイツの言うことを聞いていれば…アレン達があんな目に遭うことはツ…!!」

「一志…」

桂が呼びかけるが、前原には聞こえていない。

「俺が…俺がツ…」

「一志!」

耐えられなくなった桂は思わず前原の頭を抱き込む。

「大丈夫…大丈夫だから!心配するな!」

桂が必死に言い聞かせるように言う。

それでも、前原の身体の震えはなかなか止まらなかった。

第19章 血の臭いは鉄の臭い（後書き）

神威「ねえねえ俺の出番まだ？」

万斉「拙者等も全然でござるな」

愛華蝶「ごめんまだ出ないかも」

第20章 だるまさんは転ばない(前書き)

愛華蝶「こないだ前髪切ったよー！」

神楽「だいぶスッキリしたアルな」

桂「前髪が左に行ってるから俺とお揃いだな」

愛華蝶「それ切ってもらった後で気付いた」

第20章 だるまさんは転ばない

「命様」

ホテルの和室。命がお茶を飲んでいる後ろで、縁i n g...じゃなかった。縁が命に報告をする。

「第七師団団長、神威殿からの伝令です」

「何ですか？」

「...『もう殺しちゃってもいい？』だそうです」

それを聞いた命は頭に手をやると、小さく溜息をついた。

「せっかちな人ですね」

苦笑いをしながらそう呟き、縁に向き直る。

「指示はまた後ほど出します。それまで待っていて下さい。と伝えて下さい」

「了解しました」

「一志。おーい、一志」

いつものように公園で顔を合わせた前原とデビット。しかし前原はベンチに座ったままぼーっとしている。

「おいつて!!聞いてんのか!？」

デビットが前原の耳元で叫ぶと、ようやく聞こえたようにデビットの方を向いた。

「あ…ああ、悪い」

「どうしたんだよ。何か今日は変じゃねーか？」

デビットが聞くと、前原は表情を曇らせた。

「いや…友人が何者かに襲撃を受けてな」

「襲撃？」

「ああ。まあ貴様には関係ないことだ」

前原の話聞きながら、デビットは昨日の坂本襲撃の事を思ったが、関係ないと思い、何も言わなかった。

「!?!」

突然前原が刀を抜きながら立ち上がり、その切っ先をいつの間に表示されたのか、後ろにいた男の首筋に当てる。

男も前原と同じタイミングで刀を抜き、前原の額に刃を向ける。

「え!?!え!?!何だ!?!いきなり!?!」

突然の出来事にただ驚くしかできないデビット。そのデビットを無視して前原は男に語りかける。

「…随分無作法だなあ。侍らしくないんじゃないか？」

「河上万斉」

前原にそう呼ばれた男、万斉は薄笑いを浮かべた。

「さすがでござるな。気配は完全に消していたでござるが」

「いや何かもうお前が近づいてくるだけで寒気がする。早く消えてくれないかな？」

「酷いでござるな。せつかく会えたというのに」

「気色悪いことを言うなグラサンヤローが。さっさと宇宙にでも…」

そこまで言ったところで、前原はあることを思い出す。

「貴様ら、確か宇宙にいたんじゃないかったのか？いつのまに帰ってきたんだ」

「ぬしの情報量はどれほどでござるか…。そんな事まで知っているとは。ちよつとした用事で地球コウチに帰ってきただけでござるよ」

刀をおさめながらそう言う万斉に対して、前原は刀をおさめようとせず、警戒心を解かない。

「フン、どうせ寺門通の新曲だどうのこうのたる？そんな敏腕プロデューサーが俺に何のようだ？」

「今回お通殿は関係無いでござる。拙者はぬしに鬼兵隊に入って貰いたく…」

つうー…

万斉の首筋に、前原の刀が紅い筋を描く。

「…何度も同じ事を言わせるな。頸動脈は確かここだったか？」

「冗談でござるよ冗談」

そう言った万斉は、前原のすぐ後ろに立つ男の子の存在に気付く。

「ところで、その子供は何者でござるか？」

「ああ！？子供って言うんじゃねーよ！」

子供と言われたことで頭に血が上ったデビット。そのデビットを前原が静かに宥める。

「よせデビット。アホが移るぞ」

「アホとは失礼な…。で？この子供は知り合いでござるか？」

「この間知り合った」

素っ気なく返事を返す前原。その顔はどこか辛そうだった。

「…坂本辰馬。やられたそうでござるな」

その名前を聞いて、前原は目を伏せる。

「…貴様こそ、どこでそんな情報を手に入れてきたんだ」

万斉はそれには答えず、右手を伸ばして自分より少し身長の低い前原の頭を撫でる。

「辛い気持ちは分かるが、男が泣くんじやないでござるよ?」

「貴様ツ!!撫でるな!!そしてお母さんみたいに言い聞かせるな!!」

前原は怒って、刀でそのまま万斉の首を取ろうとしたが、万斉が咄嗟に身を屈めたので、刀は虚しく空を切り裂いた。

「何かあつたら拙者の所に来るといい。しばらくはコッチにいるつもりでござるからな」

万斉がポケットから紙切れを取り出して前原に向かって投げる。その紙切れを乱暴に懐に突っ込んで、前原は万斉に怒鳴りつける。

「誰がノコノコと敵陣に乗り込むか!!このグラスアンヘッドホンヤロー!!!」

「フフ…じゃあ、待ってるでござるよ」

そう言つて万斉が立ち去つた後、前原は盛大な溜息をつき、デビツトは驚きに顔を歪ませていた。

(坂本辰馬が一志の知り合い…?じゃあ前に命が言つてたアレって…)

『まさかこんな形で見つかるとは…』

(じゃあ、命の計画にコイツも絡んでんのか…?)

第20章 だるまさんは転ばない（後書き）

来島「あれ？万斉先輩。その首の包帯どうしたんスか？」

万斉「ちよつと寝違えたんでござる」

来島「朝はそんなのしてませんでしたよね？」

万斉「ね…猫に引つかかれて」

来島「器用な猫ツスね。普通ほつぺとかじゃないツスか？」

万斉「……………」

来島「…先輩。何か隠してるでしょ」

第21章 思い出話に紅い華が咲く（前書き）

愛華蝶「ルパン三世に石田彰さんと山寺宏一さんが出てたね!!」

優羅「沢城みゆきさんや浪川大輔さんも出てたぞ!」

松陽「私は小太郎の変貌ぶりには驚かされましたね」

桂「いや、先生。アレ、僕じゃありませんから」

第21章 思い出話に紅い華が咲く

『止めて！！殺さないで！！おとうさんとおかあさんを殺さないで！！』

必死に手を伸ばし、父と母の助けを求める子供。

しかし彼等はそれを冷たい目で見下ろしていた。

『禁を犯した者は、その命をもって償う』

『それが…』

『白鬼族の掟だ』

「一志」

深夜の万事屋。時計の針はちょうど零時を指している。名を呼ばれ、瞼を開くと心配そうに見下ろす桂の顔があった。

「また…例の夢か？」

「……………」

前原は何も言わず黙って頷いた。

いつの間にか頬に流れていた涙を拭い、身体を起こす。

「…小太郎」

「何だ？」

「俺は、父さんと母さんを目の前で殺された。今回も、また目の前で大切なものを失うんじゃないかって思うと…怖いんだ…」

もう失いたくない。何も……。

「教えるよ。一志の事」

朝、唐突にそう言い出すデビットに、その場にいた全員目が彼に向く。

「デビ。どうしたんだ？いきなり」

「一志って、前に言ってた人間のことか？」

ジャスデロとティキが聞いてくるが、デビットの視線は香気に茶菓子を摘む命に向けられている。

「テメエ、前に一志の話したら妙な事言ってたよな？アレってどういう意味だよ」

「ヒッ！デビが怒ってる！」

「ジャスデロ。ちょっと黙ってる」

空気が読めないジャスデロを空気を読んだティキが黙らせる。

「…そうですね。そろそろお話してもいい頃でしょう」

手に持っていた茶菓子を置き、デビットに向き直る。口にあんこを付けたままで。

「いいでしょう。話して差し上げます」

「その前に口を拭け」

同じ頃、万事屋では

「ちょっといいか？」

朝食を終えた全員の前で前原が話を切りだした。

「皆に話しておこうと思って…」

「何アルか？いち。話って」

神楽が聞くと、前原は一瞬ためらったが思い切って口を開いた。

「俺の過去についてだ」

それを聞いて、銀時と桂は驚く。

「いいのか？一志」

「ああ。銀時や小太郎にも詳しく話してなかったし、いずれ話そう
と思ってたことだ。録音して、辰馬にも聞かせようと思う」

そう言って、懐からレコーダーを取り出してテーブルに置く。

「じゃあ、僕達は席を外した方が…」

そう言ってアレン達が外に出て行くことになると、前原は

「いや、いてくれ」

と、言った。

「君達にも、怪我はなかったものの、迷惑をかけてしまった。君達
も無関係ではないんだ」

「いや、でも…」

アレンは悪い気がしたが、ラビと神田は良かったというふうにソフ
アに座り直す。

「丁度聞こうと思ったことだ」

「俺もさ。いろいろ気になってたんさ」

「神田…ラビ…」

アレンはそれでもまだ何か言いたそうだったが、黛がその肩を掴み、その場に座らせた。

「聞こう。アレンくん」

それでアレンも渋々言うことを聞いた。

「じゃあ、長くなると思うが、聞いてくれ」

そう言って、前原は自分の過去を話し始めた。

第21章 思い出話に紅い華が咲く（後書き）

優羅「次話からはいちの過去が明かされるぞ！」

愛華蝶「長くなると思いますが、楽しみにしてて下さい！」

前原「ちなみに、塾に入った順番はそれぞれ小太郎、俺、高杉、銀時だ」

愛華蝶「あっ！ネタバレしてんじゃねーよ！！！」

第22章 恋っていいね(前書き)

愛華蝶「いよいよ前原の過去篇突入！」

桂「ちなみに、どこからどこまでをやるつもりなんだ？」

愛華蝶「前原の両親が会場ところから、攘夷戦争の終わりまで書こうと思う」

優羅「長っ！！そんなにやんの!？」

愛華蝶「だから長くなると思いますがって言ったじゃん」

第22章 恋っていいね

今から約20年程前：
攘夷戦争初期。

戦場を駆ける、1人の若い青年がいた。

「一番隊は敵の後ろから回り込め！三番隊はそこから一気に攻め込め！！」

青年のかけ声で敵に奇襲をかける志士達。曇天の空の下、敵か味方かも分からない血を浴びながら天人を斬り倒していく。

青年の名は、まえはらしゅういち前原秀一。その秀一のそばに、黒髪の青年と銀髪の青年が駆け寄り、三人は背中を合わせる。

「秀一。テメエこの人数であの大人数相手しようと考えてたのかわりゃあちつたあ無理があるんじゃないか？あねえか？」

銀髪の青年の言葉に、秀一はクスリと笑う。

「次郎長さんこそ、無理と分かっててこんなところに来たんですか？わざわざ辰五郎さんまで連れてきて」

「オイオイ、そう言う言い方はないだろ？」

黒髪の青年、辰五郎は笑いながらそう言う。

「今頃俺たちがいなければ、お前さん八つ裂きにされてたぜ」

「なに言ってるんですか。そんなの、覚悟の上じゃないですか」

戦場ではいつ何時命を落とすか分からない。もしかしたら、今背中を合わせている相手も明日にはいないのかもしれない。もしかしたら、明日には自分もこの地に立っていないのかもしれない。

「おおおおおー!!」

そんな思いを振り切るかのように、青年はまた血を浴びる。

「くっ…少し無茶が過ぎたか…」

右腕を抑えながらふらふらと森の中を歩く秀一。先程の奇襲が失敗し、彼はかなりの深手を負っていた。

「何とか逃げてきたはいいが、この傷では…」

その時、彼の目の前に1人の女性が現れた。

「こんな戦場に女性？」

しかしその女性の目を見て、秀一ははっとする。

「金色の目…まさか!」

女性は秀一に気がつくかと怯えたように目を見張る。

「貴方は…攘夷志士!」

そう言つて、女性は長い黒髪を揺らし、その場から立ち去ろうとする。

「あつ！待て！」

その女性を何のためらいもなく捕まえ、木の幹に押しつける。

「貴女、その目は白鬼族の証…攘夷志士の陣地に忍び込んで情報を盗みにきたんですか！！」

「違う！！違うんです！！」

秀一と年がさほど変わらないであろう女性は、涙を流しながら首を振る。

「確かに私は白鬼族、天人です！ですが私は情報を盗みに来たわけではありません！」

「そんな言い訳が通用するとも……！！」

そう言つた瞬間、秀一は顔を苦痛に歪め、脇腹を押さえてその場に膝をつく。

「う…くっ…」

秀一から解放された女性は、そのまま立ち去ろうとしたが、すぐに立ち止まり、秀一のそばまで戻ってきた。

「怪我を…しているんですか…？」

その声に秀一が顔を上げると、心配そうに見下ろす女性がいた。

「あ…貴女には関係ないですっ…」

平常を装おうとする秀一だが、その顔は真っ青だった。

「大変…手当てをしないと」

「大したことはありません…かすり傷です…」

すると、女性の態度が一変する。

「駄目ですよ！すぐに手当てをしないと、傷口からばい菌が入って、取り返しのつかないことになります！」

突然のすごい剣幕にポカーンとする秀一を無理矢理横にして、女性は持っていたバッグの中から包帯などの道具を取り出し、手早く手当てをする。

「ちょっと…何をしているんですか！！貴女は自分が今何をしているか分かっているんですか！？」

うろたえる秀一にお構いなしで、女性は手当てを終わらせる。

「…私、天人側から逃げてきたんです」

突然喋り出す女性。何事かと思っただが、秀一は黙って聞くことにした。

「貴方も知ってるでしょうが、白鬼族は銀河中で最も知能を有する天人です。そのため、男も女も関係なく戦場にかり出されるんです。勿論、子供も例外ではありません」

「でも、白鬼族は戦いを好まないはずです。何故…」

秀一がそう聞くと、女性は目を伏せる。

「私だって…好き好んでこんな所に来ているわけではありません。戦は嫌いです。だからここから逃げようとしたんです。そうしたら、貴方がここにいた」

すると、女性の金色の目から涙があふれ出した。

「殺されても仕方ありませんよね。戦ですもの。でも…私は…」

泣きじゃくる女性をじっと見つめ、秀一は口を開く。

「1つ、聞いてもいいですか？何で貴女は僕を助けたんですか？敵同士なら、そのまま見捨ててもよかったです」

すると女性は一言、

「…怪我をしている人を見たら、放っておけなくて…」

そう言うと、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

その様子を見て、秀一は1つ確信した。

自分は、この人を好んでいる。おそらくこの人も…。一目惚れ…なのだろうか…？

しかし、彼女は天人。敵だ。

だが、そんな事関係ないほど、この人を護りたいと思った。

「あの…失礼ですが、貴女のお名前を聞いても宜しいでしょうか？」

すると女性は、少し驚いたようだったが、にっこり笑って答えた。

「志じゆんです。貴方は？」

「僕は前原秀一です」

そして2人は恋をした。

第22章 恋っ正しいね（後書き）

秀一「こんにちは。前原秀一です。イメージC.Vは浪川大輔さんです」

志「志です。イメージC.Vは伊藤静さんです」

愛華蝶「礼儀正しい人たちだ」

第23章 脱退と書いて裏切りと読む(前書き)

愛華蝶「今日から試験だー(笑)」

銀時「(笑)じゃねーよ!!勉強しろ!」

愛華蝶「銀ちゃんにそんな事言われたくない」

第23章 脱退と書いて裏切りと読む

秀一が数日前から帰らなかつた。丁度あの襲撃に失敗した日からだ。最初のうちは「方向音痴な秀一の事だから、どこかで迷っているのかもしれない」などと呑気なことを言っていたが、

「さすがに一週間も帰らねえんじゃ…」

次郎長は銀色の髪をかきむしりながら呟く。

「こんな事言いたか無えが、天人に捕まっちまったか、それとも…」
「バカ言っつんじゃねーよ！」

辰五郎の言葉を遮り、次郎長は叫んだ。

「アイツが死ぬなんざ…そんな事…」

「誰が亡くなつたんですか？」

聞き覚えの、そして一番聞きかかった声に2人が振り向くと、行方不明になっていた秀一が柔らかな笑顔で立っていた。

「秀一！」

「お前、今までどこに行つてたんだ！」

次郎長と辰五郎は秀一が無事だったことに対して心底安心した。

「心配をおかけしてすみません。それと、お二方にお話があるんです」

「話？」

秀一は2人の前に座ると、言いにくそうに重たい口を開いた。

「実は…僕、攘夷を抜けようと思うんです」

「なっ…!!」

2人は耳を疑った。今、秀一は何と言った？抜きたい…？

「そりゃあ、何か理由があるのかい？」

辰五郎が聞くと、秀一は首を縦に振った。

「この一週間、一体何があったんでイ」

次郎長にそう聞かれ、秀一はゆっくりと話し始めた。

一週間前、天人である志に傷の治療を受け、何とか一命は取り留めた秀一は、まだ傷が癒えていないから危ないです！と志に言われ、半ば強引に一週間かけて傷の回復に専念した。その一週間の間にお互いの気持ちを確かめ合った2人は、攘夷を抜けようと考えた。

元々戦が好きではなかった2人は、すぐにでも逃げようと考えたが、秀一はみんなに心配をかけたまま逃げるわけにはいかないと思い、ここに帰ってきたのだった。

秀一の話聞き終えた2人は、しばらく声がでなかった。

「裏切ったと思われるのは覚悟してます。でも僕は、彼女を護りたいと思っただんです。初めてなんです。他人を護りたいと思っただのは…。だから…お願いします」

必死に頭を下げる秀一を見た2人は、顔を見合わせる。

「それは…もう決めたことなのか？」

「はい」

「その意志は変わらないと？」

「はい。決して変わることはありません」

それを聞いた辰五郎は、小さく溜息をついた。

「…いいんじゃないか？自分で決めたことなら」

「えっ！」

もつと引き留められると思っていた秀一は思わず顔を上げた。

「戦にやる気のない奴がいても足手纏いになるだけだ。それならいねえほうがマシだ」

次郎長の冷たい言葉。それを聞いて罪悪感を感じた秀一は、また俯いてしまう。

「だが、これだけは約束しろ」

辰五郎はきつめの口調で秀一にこう告げた。

「戦が終わったなら、また3人で一緒に歌舞伎町に帰ろう」

「……………」

一緒に帰ろう。

この2人は、自分をまだ仲間としてみていてくれた。

「……ありがとうございます……」

そして、秀一は攘夷を脱退し、次の年、新たな命を育むこととなる。

第23章 脱退と書いて裏切りと読む（後書き）

愛華蝶「ねえ銀ちゃん達って20歳ぐらいだよね？」

銀時「まあそつだな」

愛華蝶「攘夷戦争始まったのが20年前だから始まった年にみんなが生まれたと考えていいね」

銀時「そうなるか？」

愛華蝶「ちなみに一志の誕生日は4月11日だからまだみんな生まれてないよ」

第24章 狂い咲きの桜に狂った輩（前書き）

愛華蝶「今回長い」

神楽「何か眠くなってきたアル」

アレン「ちょっと寝ちやダメだよ神楽ちゃん」

神楽「うっさいアル。ダメガネ」

アレン「いや、僕新八くんじゃないから」

第24章 狂い咲きの桜に狂った輩

「志が逃げた」

天人側の陣内、主に作戦をたてる白鬼族の主将がそう告げた途端、陣内はざわめきに包まれた。

「調べたところによるとどうやら人間と駆け落ちをしたらしい」

陣内が再び騒がしくなる。

「白鬼族の掟に従い…殺せ」

秀一が攘夷を脱退してから3年…。桜が舞い散る4月。

「秀一さん。そろそろ御飯が出来ます」

「分かりました」

秀一と志は、人が寄りつかない小さな小屋で静かに暮らしていた。

「一志。御飯だぞ」

「はぁーい！」

トトトテと秀一に駆け寄る小さな子供。長い髪に金色の左目。秀一と志の息子の一志だった。

「じゃあ僕、おかあさんのおてつだいする!」

「一志はいい子だな。でもその前にちゃんと手を洗ってくるんだぞ。一志出来るかな?」

「できる! だって僕、もう3さいだもん!」

元氣よく返事をして古井戸の方へ走っていく。

「あれからもう3年ですか…時間が経つのは早いですね」

走っていく一志の後ろ姿を見つめながら呟く志。

3年前、一志が産まれたとき、2人は驚愕した。

「左目が…金色…?」

天人と人間の子供は前例がなかったため、2人はこうなることを知らなかった。

「まさかこんな形で白鬼族の血が受け継がれるなんて…」

これからのこの子の生活を考え落胆する秀一だったが、志はその子を抱き上げ、小さな頭を撫でた。

「この子の名前、もう決めてあるんです。一つの志いっしんに生きるなまという意味で、一志。私と秀一さんの名前から漢字をとったんです」

嬉しそうにそう言う志はまるで天使のようだった。あの日から、秀一には護るべき者が増えた。

古井戸で手を洗った一志が2人の元に戻ろうとしたとき、一志は背後に何かの気配を感じ、振り向いた瞬間。

「遅いですね。一志」

手を洗いに行ったままなかなか帰ってこない一志を心配した志が咳く。

「そんなに遠いわけでもないと思いますけど…ちょっと見てきましよう」

秀一がそう言って行くこうとしたとき、

「捜し物はコレですか？」

2人が声のした方を向くと、子供が手を後ろに組んで立っていた。その子供の後ろに立つ男が捕まえていたのは…

「一志!」

男に抱えられるように捕まえられた一志は、今にも泣き出しそうな表情でこちらを見つめている。

「まさか貴女が人間と子供を作るとは思っていませんでしたよ。志」

「志より7歳ぐらい年上に見えるその子供を見る志は、少し怯えたように震える。」

「志さん。あの子供は一体…?」

「命…。天人の軍で諜報活動を行う部隊の隊長です」

「え!?!あんな子供が?」

あり得ないというように声を上げる秀一に、命は哀れみの眼差しを向ける。

「貴方もお気の毒でしたね。こんな女のために命を落とす事になるなんて」

「命を落とす…?」

わけが分からない秀一がそう呟くと、命はクスクスと笑った。

「志から聞いてないんですか?白鬼族の掟を」

「掟…」

「はい。白鬼族は一族の血を汚したくないと言うことにかけてはどの種族よりも執着していましたからね。『白鬼族は他の種族と恋をするべからず。掟を破れば相手共々討ち取るべし』…とね。まあ白鬼族の掟も何も、戦中のこのご時世に天人と人間が恋に落ちるなんて言語道断なんですがね」

黙ってそれを聞く秀一の後ろで、志は小さな声で「ごめんなさい、ごめんなさい」と何度も謝っていた。

「ですが、私も鬼ではありません。秀一さん。貴方に選択肢を与えましょう」

命は意地悪そうに笑う。

「志とこの子供の命を捧げるなら、貴方の命は助けましょう。志と貴方の命を捧げるなら、この子供の命を助けます」

「つまり…僕の命か、一志か、どちらかを選べと…？」

「そう言うことです」

秀一は、肩をすくめて笑う命を睨みつけ、いつでも戦えるようにと常に腰にさしていた刀を抜き、志を背後に庇う。

「そんな掟は何ですか」

「はい？」

「僕は彼女を死んでも護ると決めたんです。一志も同じです。そんなくだらない掟で彼女達は死なせません！」

それを聞いた命は溜息をつく。

「仕方ありませんね…」

そう言うと、右手を挙げた。

「殺せ」

その一言で、後ろに控えていた部下達が一斉に秀一と志に斬りかかってきた。

秀一は数十人の相手に臆することなく着実に敵を減らしていき、ものの30分で、残りを命と一志を捕まえている男だけに減らした。

「さすが“元”攘夷志士ですね。感服しました」

パチパチと拍手をする命。秀一は肩で息をしながら呟く。

「ハア、ハア…おかしいですね…白鬼族は…確か戦わない種族だったはずですよ…?」

「フフ…それはもう過去の話ですよ」

命は腰にさした刀に手をかけ、ゆっくり鞘から抜いていく。

「我々はこの攘夷戦争で易々と殺されないためにいろんな種族の戦い方を見て学んだんです。もう頭だけなんて言わせませんよ」

口の端を上げ、妖しく笑う命は、子供にもかわらず凄まじい威圧感を放っていた。

「ですから、私の事も子供だからと言って見くびらない方がいいですよ」

その途端、命が目にも止まらぬ早さで秀一に斬りかかってきた。秀一は何とか刀で防いだが、命の刀は秀一の首筋まで数センチ程しか離れていなかった。

「惜しい。あとちょっとで首を落とせたのに」

にやっと笑って秀一と距離を開けると、休む間もなく攻撃を繰り返しながら話し出す。

「つまんないですね。本気出して下さいよ。いや、“出せない”んですよね？私達の手元には貴方の可愛い子供がいますからね」

秀一が一志の方に目をやると、男に小刀を突きつけられ、少し頬から血が出ている。

「そうですね。確かに動きにくい。だったらこっちから片付けましよう」

秀一はそう言って命に正面から突っ込んでいった。

「何のつもりですか」

あざ笑いながら命が刀を振るうと、秀一はそれを鮮やかにかわし、一志を抱える男の胸を横一文字に切り裂いた。

「しまった!!」

男が倒れる直前、解放された一志を抱き上げる。

「おとうさん！」

「一志、怖かったな。もう大丈夫だ」

泣きながら抱きついてくる一志の頭を撫でながら優しく声をかける秀一のそばに志も駆け寄る。

「これで互角、いや、こちらが優勢です」

命は何も言わず立ち尽くしていたが、無表情だった口元が緩む。

「フツ…フフフ…あははははははは！」

突然命が笑い出した。

「フフフツ、まだ気付いていないんですか？私がたったあれだけの戦力を引き連れてくるとでも？甘いですね」

秀一が眉をひそめた途端、左側から血が飛んできた。

「……………え？」

血が飛んできた方を見ると、志が声も上げずに前のめりに倒れた。

「じつ…志さんっ！」

秀一が駆け寄ろうとすると、目の前に男が立ちふさがり、刀で秀一の左胸を貫いた。

「戦いはまだ終わっていないのに、油断は禁物ですよ？秀一さん」

その光景は、まだ幼い一志の目に狂い咲く桜と共に鮮明に残った。

「…おとうさん？おかあさん？」

まだ虫の息の2人に掠れた声で呼びかけるが、2人が応えることはない。ふと気付くと、両手には真っ赤な血がべったりとこびり付いていた。

「あ…ああ…うわあああああああああ！！！」

絶叫する一志を命が無理矢理立たせ、2人の元から引き剥がす。

「私がとどめを刺す。この子を見てろ」

嫌がる一志を男たちに託し、命は2人の倒れているところに歩み寄る。

「止めて！！殺さないで！！おとうさんとおかあさんを殺さないで！！！」

一志は必死に手を伸ばし助けを求めるが、その一志を男たちがしっかりと押さえ込む。

「禁を犯した者は、その命をもって償う。それが白鬼族の掟だ」

後ろを振り向かずになんかそう言った命は、何の躊躇もなく刀を振り上げ、そのまま振り下ろした。

「……………！！！」

それを見た一志は、ショックで気を失い、その場に倒れてしまった。

「本来はこの子も殺すべきなんですが…どうしましょ」

うーんと悩む命の首筋に後ろから刀が突きつけられる。

「その子供をこちらに渡してもらおうか？天人諜報隊長さん」

人間。声を聞いただけですぐ分かる。

「おや、こんな子供を一体何に使うんです？」

「貴様には関係ない。大人しく渡してくれば自分の血を見ることはないぞ」

命の部下が割り込もうとしたが、それを命が手で制す。

「分かりました。取引をしましょう」

「取引？」

「私達がこの子供をあなた方に渡せば、あなた方はこの子供を調べ上げ、弱点を探し、私達は戦で大分不利になります。ですが、あなた方がそちら側の情報を教えて下さるのならこの子をあなた方に差し上げましょう」

男は一瞬躊躇ったが、すぐ交渉に応じた。

「しかし、我々の情報と言っても、一部の情報しか知れないが？」

「構いませんよ。そこ一带ぐらいは殲滅できるでしょう」

交渉成立。

この、1人の男による裏切りが、後の攘夷戦争に甚大な影響を与えることとなる。

第24章 狂い咲きの桜に狂った輩（後書き）

愛華蝶「ちなみに命達の方の話はここで終わってます」

桂「ここから先は万事屋メンバーしか聞いてない話だな」

命「ちなみに私の幼少期のイメージJCVは下野紘さんです」

愛華蝶「黙れや目立ちたがり」

第25章 脱走中（前書き）

愛華蝶「ちなみに言い忘れてたけど、一志の幼少期のイメージCDは梶裕貴さんです」

ラビ「それ活動報告に書いてあったさ」

愛華蝶「見てない人もいるかもしれないと思って」

第25章 脱走中

「逃げた!？」

秀一と志が殺されて1年がたったある日、幕府にも極秘に扱われている研究施設に、その声は響いた。

「ちゃんと鍵をかけておけと言っただろう!!！」

「いや、かけていたんですが…！」

「チツ、所詮は子供だ!草の根分けてでも捜し出せ!!！」

「ハア…ハア…」

木陰で座り込み、息を切らしている子供。先程研究施設から何とか抜け出した一志だった。しかし、彼の長かった髪は今は肩ぐらいまでのショートカットになっている。

天人と人間の混血児と言うことで、幕府から実験体として研究施設に閉じ込められた一志は、あらゆる実験を施され、その過程で髪を切られたのだった。

白鬼族の髪の毛には、身体同様に血が通っており、切られたときの痛さは小さな身体には耐えきれないほどの痛みだった。

「つつ…!!！」

一志は少し顔を歪め、腹部を押さえた。日頃から研究員共に飲まされたわけの分からない薬のせいでたびたび腹痛が襲ってくるのだ。

「いたか？」

「いや、駄目だ」

「あっちの方を捜せ！」

すぐ近くから研究員共の声が聞こえた。ふらつく足取りでその場を離れようとしたとき、

ズツ…！

「あつ…！」

一志はそのまま崖を転がり落ちた。

同時刻、山の中でポニーテールの子供、桂小太郎と、灰色がかつた長髪の男、吉田松陽がつくし採取をしていた。

「先生。やっぱりこんな山にはないんじゃないんですか？」

「おかしいですね…昔はこの辺に山ほどあったのに」

桂が背負っている自分よりも大きなかごにはまだ何も入っていないかった。

「小太郎、もう諦めませんか？つくしはまた今度にしましょう」

桂はそれを聞いてしばらくむくれていたが、しづしづ言うことを聞いた。

ガサガサガサツ

「ん？」

突然上から木の葉の擦れる音が聞こえた。音のした方を見ても、何も無い。

「…鳥かな…？」

桂がそう呟いて松陽の後を追おうとしたとき、上から何かが落ちてきて桂が背負ったかごに入った。

「うわぁ！！！」

その声を聞いた松陽が駆けつけると、桂が倒れ込んでいた。

「どうしたんですか小太郎！」

「なっ、何かがかごの中に…！」

2人がかごの中をのぞき込むと、中には思いがけないものが入っていた。

「子供…！？」

かごの中には、傷だらけのかなり衰弱した男の子が入っていた。

「なっ、何で人が…！？」

パニックになる桂に、松陽は至って冷静に答える。

「おそろく、この崖から落ちてしまったんでしょ」

「いや落ちてきたとしてもピンポイントでこの中に入るってどんな奇跡ですか!？」

「かなり衰弱しているようですね。一旦連れて帰りましょう」

秀一と志を殺され、気を失った一志が次に目を開けると、真っ白な部屋にいた。自分は手術台に寝かされ、手足は拘束されていた。

『大丈夫だよ。僕達は君を殺したりしないから』

男は笑顔でそう言ったが一志はその後、死ぬ程の苦しみを味わわされた。

『殺したりしないから』

うそつき

その日から、一志は人を信じなくなった。

第25章 脱走中（後書き）

銀時「何か俺が知らない頃の先生だ。新鮮だな」

桂「お前が塾に入ったのは一番最後だったからな」

黛「て言うか、何でつくしなんですか？」

桂「食べる気満々だったから」

黛「あゝ、まあ美味しいですもんね」

第26章 はじめてって何か嬉しいよね(前書き)

愛華蝶「こんな連続で更新でいつ以来だろ」

神楽「白夜又再臨篇初期以来アル」

愛華蝶「何か書いてるとすっごい楽しくて(笑)」

前原「こつから先は作者の捏造まみれだ」

愛華蝶「まあよくもここまでデタラメを考えられるもんだ」

銀時「自分だろーが」

第26章 はじめてって何か嬉しいよね

目が覚めると見たことのない天井が目に入った。

『どこだ……?』

ぼんやりと考えているとポニーテールの男の子が顔をのぞき込んできた。

「あ！起きた！」

男の子は嬉しそうに笑った。一志はとっさに左目を隠す。その動作が頭を抱えているのかと勘違いしたらしく、男の子は心配そうに聞いてきた。

「あたまいたいのか？大丈夫？」

「え……あ……うん……」

一志が曖昧な返事をする、男の子はまたすぐに笑った。

「よかった！待ってて！いま先生よんでくるから！」

そう言うと、男の子は部屋から出ていった。

「せんせい……?」

しばらくして帰ってきた男の子は、長髪の男性を連れて戻ってきた。

「良かった。大分衰弱していたから心配したんですが、問題なさそ

うですね。気分はどうですか？」

男性は一志の額に触れようとしたが、一志はとっさによけてしまった。

「…どうして左目を隠しているんですか？」

一志がずっと左目を抑えたままに違和感を持った男性がそう聞く。

「こ…これは…」

「目が痛いんですか？ちょっと見せてください」

「だ…ダメッ！！」

男性が手を退かすと、そこには金色に輝く瞳があった。

「この目…まさかあなた…」

「ッ！」

反射的に逃げようとした一志の腕を掴んで、男性はそのまま喋り出す。

「1年ほど前、幕府で天人と人間の混血児を捕まえたと言う噂が立っていましたか…まさか君がそう？」

「そんなこと聞いてどうするつもり？僕を幕府に連れ戻すの？」

「いえそう言うわけでは…」

男性がそう言いかけたとき、一志は男性の手を振り払い、隠し持っていたナイフを自分に突きつけた。

「あんなとこに戻るくらいなら、死んだ方がマシだ!」

しばらく続く沈黙。それを破ったのは男性だった。

「あなた、名前は？」

「は……？」

「私は吉田松陽といいます。あなたの名前は？」

「ま……前原一志……」

「一志ですか……いい名前ですね」

人が死のうとしてんののに、と思いつつながら松陽を見ていると、松陽はまた質問をしてきた。

「あなたお家はどこですか？ご家族が心配してるんじゃないですか？」

「……………」

その時一志の頭に浮かんだのは、白鬼族に殺された秀一と志の血が桜と共に飛び散る映像。

「かぞくなんて……いない……うちも……ない……」

俯きながらそう言うと、松陽は聞いてはいけなかったと思い、複雑な気持ちになった。

「ねえ、帰るところないならここにいなよ!」

突然男の子がそう言って顔を近づけてきた。

「え……？」

「ここ、いま僕と先生しかいないんだ。だからここにいなよ！ねっ！先生いいでしょ？」

「ええ、私は構いませんが…どうですか？」

そう聞かれた一志は少し考えた。

もしかしたら、こいつらは幕府の人間かもしれない。僕を研究施設に連れ戻すつもりかもしれない。

でも、こいつらからは、あそこにいた研究員共と同じような感じはなく、むしろ暖かい感じがした。

「……………うん。いる」

「ホント？やったあ！」

一志がそう言うと、男の子は嬉しそうに飛び跳ねた。

その日の夕方、一志は縁側に座って桜の木を眺めていた。ひらひらとピンクの花びらが落ちていく。

『おとうさん！おかあさん！』

「……………」

「桜、好きなの？」

さっきの男の子が後ろから声をかけてきた。

「うわっ！…！」

いきなり後ろから声をかけられ、驚いた一志は縁側から転げ落ちた。

「大丈夫!？」

「…へーき」

「ごめん。まさかそんなにおどろくとは思ってなくて…桜好きなの？」

一志が縁側に座り直すと、また同じ事を聞いてきた。

「…桜はキライ」

そっぽを向きながらそう呟く。

「そうなんだ…きれいなのに」

ちよつと残念、と言うようにため息をつき、一志の隣に座る。

「あつ、僕桂小太郎って言うんだ。よろしくね。きみ今なんさい？」

「…4さい」

「じゃあ僕とおなじだ!たんじょうびは？」

「4月11日…」

「あゝもうすぎちゃったね…せっかくお祝いしたかったのに…。僕は6月26日なんだ!」

嬉しそうに話す桂をどうでもよさそうにチラッとだけ横目で見ると、すぐ視線を桜の木に戻す。

「ねえ、お前らは幕府の人間じゃないの？」

「え?幕府?」

唐突に聞かれた桂はすぐに首を横に振った。

「ううん。僕と先生はそんなんじゃないよ。先生は天人と人がなかよくできないか考えてる思想家なんだって」

「しそつか…？何それ」

「うーん、僕もよく分かんないけど…」

何だそれ…と思ったが、とりあえず幕府の人間ではないと分かった一志。

「ねえ、さつき先生が言ってた天人と人との混血児ってほんと？」

やっぱり聞かれた。当然だ。

「…やっぱり、キミも僕のこときもちわるいと思う？」

「へ？」

「僕、天人の血がながれてるせいで、左目だけ色ちがうし、さんざん『きもちわるい』とか『こわい』とか言われてきたんだ。キミも、僕のことそう思ってる？」

聞きながら一志は、何当然のこと聞いてんだ、と思った。当たり前じゃないか。地球を攻め滅ぼしにきた天人の子供なんて、人間にとってみれば敵だ。絶対コイツも恐いとか言うに決まって…。

「ううん。全然こわくなんかないよ」

ほらみる。やっぱり…

「えええええ！？」

いまコイツ、恐くないって言ったあ！？嘘だろ！？

「な…何で!?!」

「何でって…僕も似たようなものだから…」

「え…それはどういう…?」

すると、どこからか声が聞こえた。

「やーい、男女ー!」

声のした方を見ると2、3人の子供が石を投げてきた。

「あぶない!!」

一志を庇い、一志の前に立ちはだかった桂の額に、投げられた石の一つが当たる。

「オイッ!」

一志が駆け寄ると、桂は額から血を流していた。

「うわっやべー。にげる!」

桂の傷を見た子供たちはすぐ逃げてしまった。

「オイッ大丈夫か?」

「へーきだよ…なれてるし」

「なれてるって…」

「僕、かおだちが女の子みたいって言われて、ともだちもろくにで

きなかつたんだ。『きもちわるい』って言われて」

桂が服の裾で血を拭きながら言う。それを聞いて一志はきよとんとした。

「え？女じゃなかったの？」

「え！？ちがうよ！！さっき名前言ったじゃん！！桂『小太郎』って！！！」

「いやだから女なのにへんな名前だなと思った」

「ひ、ひどい！」

「だってほんとに女だと思ったんだもん！！！」

そのまま2人でにらみ合っていると、だんだんおかしくなってきた、2人でお腹を抱えて笑い出した。

「あははははは！！なーんだ、女じゃないんだー！あははは！！！」

「あたりまえだよー！小太郎なんて女の子いないよー！」

ひとしきり笑ったところで、一志は桂に聞いてみた。

「きみ、おとうさんとおかあさんはいるの？」

「いないよ。びよーきで死んじゃって…すむところもないんだ。ひとりぼっちだったんだ。生きる方法もないし、死のうかと思った」

ほんとだ。僕と似てる…一志はそう思いながら黙って桂の話の話を聞いていた。

「でも、僕が死のうとしたときに先生がたすけてくれたんだ。僕が死のうとしたときに、先生は『生きなさい』って言ったんだ」

生きなさい

その言葉は一志の胸に深く突き刺さった。

「…きめた。僕、きみのことまもる。きみは僕のこと、はじめてまもってくれた。だから、さっきみたいなヤツらが来ても、僕が死ぬまでまもる」

突然の宣言に呆気にとられる桂だが、苦笑しながら呟いた。

「死ぬまではおおげさだよ。それに、『きみ』って呼ぶんじゃないよ、名前と呼んでよ」

そう言われた一志は、

「名前…桂さん？」

「何で同い年なのにさん付け？」

「じゃあなんて呼べばいいの？」

そう聞かれた桂は、即答した。

「小太郎でいいよ。僕もきみのこと一志って呼ぶから」

「こたろう…？」

名前を呼ばれた桂は顔を赤くして笑った。

「うれしい。はじめてのともだちだ」

「ともだち…？」

一志にとっても初めてのものだった。そう思うと、一志も嬉しくな

ってきた。

（はじめての……ともだち……か）

第26章 はじめてって何か嬉しいよね（後書き）

神田「前原一志って、どっから元ネタ引っ張ってきたんだ？」

愛華蝶「幕末に活躍した前原一誠って人だよ。高杉晋作や桂小五郎と同じように松下村塾に入ったんだ。萩の乱の首謀者として処刑されたんだって」

前原「詳しくはパソコンで検索すれば出てくるぞ」

第27章 喧嘩するほど仲がいい（前書き）

銀時「何か今いちが主役みたいな感じになってるから銀魂じゃねーじゃん」

愛華蝶「銀魂じゃなかったら、じゃあいちたま一魂？」

アレン「うまい！」

銀時「うまくねーよ！！俺の出番返せ！！！」

第27章 喧嘩するほど仲がいい

「何これ？」

一志が松陽の元で暮らすようになってから数日たったある日、一志は松陽から深緑色の表紙の本を渡された。

「それは教本です」

「きょうほん？」

「勉強をするときに使う本のことです、これを使って授業をするんです」

本の裏を見ると、裏表紙の左下にきれいな字で、『前原一志』と書いてあった。

「僕ももってるんだ！」

見ると、桂も一志と同じ本を持っていた。

「それからもう一つ…」

そう言つて松陽が取り出したのは、治療用の眼帯。それを一志の左目に当てる。

「紐の長さは大丈夫そうですね。痛くありませんか？」

「これは…？」

一志が聞くと、松陽は笑って答えた。

「こうしていれば、あなたが天人と人間との混血児だと言うことが
バレずにすみますからね」

「そっか…ありがとう！」

その日の昼間は新しく貰った教本で授業をした。その後すぐに授業
でやったことをテストに出されたが、記憶力と知能の高い白鬼族の
子供だけあって、初めてにもかかわらず、一志は百点を叩き出した。

「すごい。一志ってあたまいいなだね」

桂に褒められて、一志は少し照れたが、すごく嬉しかった。

それから5日後、松陽は1人の男の子を連れて帰ってきた。

「今日から一緒に勉強することになった、高杉晋助くんです。仲良
くしてあげて下さいね」

松陽が連れて来た男の子、高杉は、深緑色の目に紫色の髪をしてい
た。どこかのお坊ちゃまらしく、どこことなく気品が漂っている。

（きれいなかみだな…）

そんな事を思いながら高杉を見てみると、目が合ったが、高杉はす
ぐそっぽを向いてしまった。

（何コイツ。かんじワル）

これが、後の鬼兵隊総督となる男、高杉晋助との出会いだった。

「イタタタタ！！ちよっ！はなしてよ！」

突然聞こえた桂の声に素早く反応した一志が駆けつけると、あろう事か、高杉が桂の長い髪の毛を引っ張っている。

「オイッ！何してんだよテメー！！！」

一志が高杉につかみかかった。しかし高杉に反省の色はなく、深緑色の目で一志を睨みつけている。

「小太郎にあやまれ！！！」

「やだね。何でそんなヤツにあやまらなきゃいけないんだ」

「何だと！？」

「やめろふたりとも！」

一志と高杉の間に桂が割り込んできて2人を止めようとする。

「コイツきもいんだよ！女みたいなかおして！オレにやたらかまってくるし、うぜーんだよ！」

それを聞いた一志は、頭が真っ白になった。

バキッ！

次の瞬間、一志は高杉を殴り飛ばしていた。殴られた高杉は畳の上

に倒れ込む。

「何しやがる!」

「おまえ…もう一回言ってみろ」

一志は高杉を殴った手を握り締めたまま呟いた。

「こんどはなぐるだけじゃすまさねえぞ」

高杉も殴られた頬をさすりながらゆっくりと立ち上がる。

「上等だ。どつからでもこい」

2人はにらみ合い、そして…

ゴツンッ

「いてっ!」

突然頭に走った衝撃。2人が顔を上げると、そこには松陽が腰に手を当てて立っていた。

「何をしているんですかあなた達。仲良くしなさいと言っただけでしょう?」

「だってコイツが…」

「コイツじゃありません。ちゃんとした名前があるでしょう」

2人がお互いを指して言い訳をしようとする、松陽にそう言われてしまった。

「2人とも何があったかは分かりませんが、とりあえず謝りなさい」

松陽にそう言われ、一志はふてくされながらも高杉に頭を下げる。

「ごめんなさい」

「ほら、次は晋助が謝る番ですよ」

しかし高杉は、一志に謝らず、べえっと舌を出して逃げてしまった。

「晋助！」

松陽が追いかけてよとしたが、すでに高杉の姿はなかった。

「まったく…喧嘩なんてらしくありませんね。小太郎」

「すみません…」

しゅんとなる桂の隣で、一志は高杉に対して殺意を覚えた。

「何アイツ！あんなヤツ大ツキライ！」

癩癩を起こす一志を宥める松陽と桂。

「まあまあ落ち着いて下さい。あの子も君達と同じなんですよ」

「おなじ…？」

「ええ。あの子は、有名なお屋敷、高杉家の次男なんですが、ご両親を亡くされてご長男から家を追い出されたそうなんです」

やっぱりアイツお坊ちゃまだったのか…と思いながら話を聞いていると、桂が松陽に聞いてきた。

「どうしてお父さんとお母さんが死んじゃったんですか？」

すると松陽は、少し言いにくそうに口を濁す。

「火事だったそうです。晋助と、晋助のご両親が旅行先で泊まった旅館が火事になって、晋助を逃がしたご両親は間に合わずに炎にのまれたそうです」

たまたま用事で遅れた兄は、父と母が死んだと言つた訃報を聞き、1人だけ生き残つた高杉を責めたそうだ。

「アイツ……」

塾の近くにある池のほとりで、高杉は石を投げていた。石が落ちた場所を中心に波紋が浮かぶ。

『お前のせいで父さんと母さんは死んだんだ！お前の顔なんか見たくない！』

兄の言葉が頭に残って、ずっと頭の中をぐるぐる回っている。

「……つくそつ！」

先ほどよりも力強く石を投げ、高く水柱が立つ。

「晋助！」

後ろから呼びかけられ、振り向くと見たくない顔、桂と一志がいた。

「こんなところにいたんだ…早くかえろ。先生も心配してるよ」
「うるせーんだよ！さっきも言っただろ！？オレにかまうなよ！」

そう言っただ怒鳴る高杉を見て、一志は高杉に歩み寄る。

「な、何だよ！オレはかえらねーぞ！」

「まだ、あやまってもらってない」

「はあ？」

「まだ小太郎にあやまってもらってない。ちゃんとあやまれ」

それを聞いた高杉はすぐに立ち上がり、一志を睨む。

「おまえまだそんなこと言ってたのかよ！あやまらねーって言うた
だろ！？」

「いーかげんにしろ！！！」

頑として謝ろうとしない高杉に、とうとう一志がキレた。

「テメーのじじょうなんか知るかよ！かってに八つ当たりして
あやまらないだあ？調子にのんな！！そんなんだからアニキに捨て
られたんだよ！！！」

その言葉が高杉をさらに怒らせた。

「だまれ！！！」

そう叫んだ途端、高杉が一志につかみかかった。押し倒された形になつた一志は地面に後頭部を打ちつけてしまう。

「いつ…！」

「おまえ何様のつもりだよ！！えらそーにべらべら言いたいほうだ
い言いやがって！おまえなんかオレの気持ちなんかわかるワケな
いだろ！！」

それを聞き、一志と桂の胸がチクリと痛んだ。

「…わかるよ」

ぼそりと一志が呟いた。

「ぼくも、おとうさんとおかあさん、死んじゃったし…」

「え…」

一志の胸ぐらを掴んでいた高杉の手の力が少しだけ緩む。

「小太郎も一緒。おとうさんも、おかあさんも、すむところもない。
だけど、先生が助けてくれた。おまえだってそうだろ？」

家柄、友達もできなかった高杉に声をかけたのが、当時高杉のこ
ろで家庭教師をしていた松陽だった。

「家の中にはかりいなくて、たまには外に出てみたらどうですか？」

「…外にでたって、何もいいことないもん」

「そんな事はありませんよ。一緒に出てみましょう。ね？」

渋る高杉を半ば強引に連れ出した松陽。外に出ると、窓からしか見
たことのない世界がいつぱいに広がっていた。花や木や、川や鳥。
家の中では知れない世界。

松陽は、高杉に初めての世界を見せてくれた人だった。家を追い出されたときに手を差しのべてくれたのも松陽だった。

「一緒に来ませんか？」

その時、高杉は涙を流しながら松陽にすがりついた。この人について行こう。松陽は高杉が初めて心を開いた相手だった。

「あ……」

気がつくと、高杉の目から大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「……かえろ。僕たちのいえに」

一志が優しく語りかけると、高杉は倒れたままの一志の胸にしがみつき、声を上げて泣き出した。

「うえええん……」

「だいじょうぶ。もう1人じゃないから」

そう言いながら、一志は高杉の紫色の綺麗な髪を撫でていた。まるで、子供をあやす、お母さんのように……。

「はい、ちゃんとあたまを下げて」

一志に言われるがままに高杉は頭を下げる。

「ごめんなさい」

「よし、言えた！」

桂に謝り、頭を上げた高杉は少し照れていた。

「あれ？高杉てれてんの？」

「べっ、別にてれてねーよ！！」

一志の言葉に顔をさらに赤くして反抗する。

「え〜？でもかおまつかだよ〜？」

「うっ、うるせーよ！」

ドボン！！

ムキになった高杉は思わず一志を突き飛ばし、池に落としてしまう。

「一志！！！」

桂が駆けつけると、すぐ一志が水浸しで立ち上がった。

「ゲホッ！何すんだ高杉！！！」

そう言った一志の左目には、あるはずの物が無くなっていた。

「一志…眼帯は？」

桂にそう言われて左目に手をやると、眼帯が無くなっていた。あたりを見回すと、水面に眼帯が浮いている。

「ヤバイ！」

慌てて眼帯を拾い上げ、左目に当てるが、もう遅かった。

「おまえ…その目…」

高杉が信じられないというような目で一志を見つめていた。しかし、一志は心に決めていた。

高杉には話そう。コイツは信じれるから。

そして、高杉も一志の正体を知ることになった。しかし高杉は一志を恐がることもなく、一志を受け入れてくれた。

それから高杉は徐々に心を開いてくれるようになった。

第27章 喧嘩するほど仲がいい（後書き）

銀時「俺の出番返せ」

愛華蝶「大丈夫だよ。次話からは銀さんが主役だから」

神楽「次話からは話の途中から目線がいちから銀ちゃんに変わるア
ルよ」

第28章 戦場に漂うのは死臭と血の臭い（前書き）

命「そう言えば言い忘れてましたが、私のイメージCDVは神谷浩史さん」

縁「私は小野大輔さんです」

ラビ「だからそれ！活動報告に書いてあったさ！」

命「念のためですよ。念のため」

第28章 戦場に漂うのは死臭と血の臭い

戦場を舞い、死肉を貪る烏

その黒いビー玉のような眸が見つめるのは1人の子供

死体の上に座り、屍から剥ぎ取った刀を肩に掛け、盗んだおむすびを食べる

次の一口を食べようとしたとき、頭に手が乗せられ、首がガクンと下を向く

血の色と同じ、紅い目を上に向けると、男が立っていた

「…屍を食らう鬼が出ると聞いて来てみれば…きみがそう？」

高杉が松下村塾に来てから2年。前原は6歳、桂と高杉は5歳になつていた。

高杉の後からいろんな子供が塾に通うようになったが、3人のように両親がおらず、帰る家がない子はいなかった。

だから、3人は他の子から変な目で見られることが多かったが、3人は全然気にせず、いつも一緒だった。

「あれ？先生は？」

部屋に入ってきた桂が前原に聞いてくる。

「先生ならどこか出かけてったよ。どうしたの？」

「いや、大したことじゃないんだけど、ちょっと聞きたいことがあるって」

前原と桂が話す部屋では他の子供がおしゃべりなどをしており、高杉は頬杖をついて教本を眺めている。

「勉強のことだったら、教えてあげようか？」

「先生が帰ってくるまで待ってるよ。ありがとう」

そう言った桂は、一番前の自分の席に座り、教本を開く。

前原の席は部屋の一番奥。壁に背をつけ、前原も教本を開く。

ガラッ

すると、部屋の襖が開き松陽が入ってくる。1人の子供を連れて……。松陽が部屋に入ってきたことで、騒がしかった空間が一気に静まりかえった。いや、もしかしたら、それは松陽のせいではなく、松陽の連れてきた子供のせいかも知れない。

「目が紅い……」

前原はそう呟いた。子供は紅い目に銀色の天然パーマの髪。前原が言えたことではないが、異形の子供だった……。

桂と高杉も教本から顔を上げ子供を見るが、あまり関心はなさそうだ。

その時、前原と子供の目が合った。子供は前原を見て、少し驚いたような顔になる。前原も、子供を見てあることを感じていた。

(コイツ、俺と同じだ…)

それは桂や高杉とは違う”同じ”だった…。

「屍を食らう鬼が出ると聞いて来てみれば…きみがそう?」

おにぎりを食べていたらいきなり男が来た。

生きた人間を見たのは何日ぶりだろう。俺はそう思いながら男を呆然と見つめていた。

「また随分と、可愛い鬼がいたものですね」

男がそう言った途端、俺は反射的に手を振り払い、男と距離をとる。刀に手をかけ、ゆっくりと抜いていく。その刃には血がこびりつき、抜くときに錆びついたような音が響く。

「…それも、屍からはぎ取ったのですか?」

男がそう聞いてくる。俺は男を睨みつけ、口元についた米粒を舌なめずりとする。

「童一人で屍の身ぐるみを剥ぎ、そうやって自分の身を護ってきたんですか…」

俺は腰を落とし、いつでも男を斬れるような体勢になる。

「大したもんじゃないですか。だけど、そんな剣、もういりませんよ」

そう言うと、男は腰にさした自分の刀に手をかける。それを見た俺は、来る、と思い、右足を少し引く。

「人に怯え、自分を護るためだけに振るう剣なんて、もう捨てちゃいなさい」

そう言うと、男は刀を腰から鞘ごと抜き取り、俺に向かって放り投げた。俺はふらつきながらも、何とか刀を受け止めたが、男の思いがけない行動に驚く。

「くれてあげますよ。私の剣。…そいつの本当の使い方を知りたいやあ、ついて来るといい」

男はそう言うと、俺に背を向け、歩き出す。

「敵を斬るのではない。弱き己を斬るために。己を護るのではない…己の魂を護るために…」

俺はしばらく茫然としていたが、その足は自然と男の後を追っていた。

「…つれてって」

ボソツと、そう言うと、男は俺の方を振り返り、その背に俺を背負った。

初めはびっくりしたが、慣れていくうちに、男の首に手を回し、男に身体を預けるようにして眠ってしまっていた。

「今日から一緒に勉強することになったお友達です。仲良くしてあげてくださいね。えっと名前は…」

松陽が口ごもっていると、子供は自分から名乗った。

「銀時。坂田銀時」

そう名乗った子供は、松陽に言われ前原と同じ一番後ろ、縁側の方に空いていた席に着いた。

あそこの席は縁側のすぐそばだから、春には桜の花びらが舞い、夏には日差しが入り込み、秋には紅葉が散り、冬には雪が降る。（まあ冬には襖が閉まってるんだけどね）

今は春。縁側からは桜の花びらが入り込んでくる。壁にもたれかけて座る銀時の銀色の頭と、薄紅色の桜はとても綺麗だった。

しかし、銀時は先ほど松陽からもらった教本を開こうとはせず、松陽の刀を抱き締めるようにして寝ていた。

（あの刀…確か松陽先生の…）

花を象ったような鍔。松陽先生がいつも腰にさしていた刀だ。それをなぜアイツが…？

疑問に頭を悩ませていると、辺りからひそひそと話し声が聞こえる。

『紅い目に白い頭…』

『鬼だ…鬼が来た』

『化け物だ…』

それは前原が聞きたくなかった言葉、聞き慣れた言葉だった。

第28章 戦場に漂うのは死臭と血の臭い（後書き）

愛華蝶「先生と銀ちゃんのやりとりは『大切な荷ほど重く背負い難い』のセリフを聞きながら書いたよ」

桂「大変そうだな……」

愛華蝶「うん。家族に変な目で見られた」

神楽「痛いー痛いヨー」

愛華蝶「神楽ちゃん……」

第29章 鬼の子と天人の子（前書き）

愛華蝶「も〜い〜くつね〜ると〜、お〜しよ〜お〜が〜っ〜」

神楽「お正月にはあ〜凧揚げてえ〜、こまを〜回してあそびまじよ〜」

黛「はあ〜や〜く〜こ〜い〜こ〜い〜お〜しよ〜お〜が〜っ〜」

銀時「何だこのグダグダなオープニングは!！」

第29章 鬼の子と天人の子

授業が終わった後、銀時は刀を抱いて縁側に座っていた。虚ろな紅い目はひらひらと舞う桜を見つめていた。

(コイツ、本当に僕にそっくり。最初の頃の僕に…)

初めて塾に来たときの前原もぼんやりと桜を眺めていた。忘れたい記憶を甦えらせる、嫌いな花。

「桜、好きなの?」

あの日桂に語りかけられたように、自分も銀時に語りかけてみる。

「…何で?」

紅い目で振り向いた銀時はそう聞いてきた。

「いや、ずっと見てるから…」

すると銀時はまた桜に目を向けて、答えた。

「好きだよ。戦場には桜なんて無かったから…」

「戦場…? お前戦場にいたの?」

「うん。ずっつとひとりで」

「両親は?」

「いない。見たこともない。気付いたら1人だったから」

親の顔も見ることがない…前原や桂、高杉は親を自分の目の前で亡

くした。けど、コイツは親が生きているのかも分からない。僕らよ
りずっと辛いかも。」

「…お前は俺と同じだよな？」

「えっ!？」

銀時の突然の言葉に前原は戸惑ってしまう。

「お…同じって、どういう意味？」

「お前の目、俺と一緒に」

その言葉を聞いた前原は、左目のことがバレたのかと一瞬ギクツと
したが、銀時が言ったのは眼帯をしていない、右目の方だった。

「他人に鬼だ、化け物だって言われて、人を信じられなくなった目。
…だった」

「だった…？」

「今は違う。今は他人を信じ始めた目。かすかに光がある目」

前原は改めて銀時の目を見た。紅く虚ろな、他人を信じていない目。
自分はこんな目をしていただけか…。

「君は人間なの？」

前原がそう聞くと、銀時は少し不機嫌そうに答えた。

「人間だよ。それ以外に何がある。お前も俺を鬼とか言うのか？」
「違うよ。人間だって聞いて安心した。僕みたいじゃなくて」
「僕みたいなの…？」

銀時が疑問を投げかけてきた。

「…僕は、人間じゃないんだ」

そう言いながら、前原は眼帯を外し、銀時に左目を見せる。それを見た銀時は目を見開く。

「僕は…人間と天人の混血児だよ」

「あ…天人…!？」

銀時の反応を見た前原は銀時から目をそらす。

「やっぱり怖いよね。やっぱり僕とキミは違うよ。僕は本物の化け物だから…」

「すげえ…」

前原の言葉を遮って聞こえた声は、銀時が言ったように聞こえたが、まさか、気のせいだよと思った。

「すげえ！」

…気のせいじゃない。

コイツ、小太郎より意外なこと言いやがった…。

「すげえ!!片目だけ色が違っつて、『家庭教師ヒットマンリポーン』の骸みてえ!かっけー!」

「あんなパイナップルと一緒にしないでよ!!」

あたふたする前原だが、銀時の目を見てはっとする。銀時の目が、さっきのような虚ろな目ではなく、生き生きとした目になっていた。

「…今の君の目も、すごくキラキラしてるよ」

そう言われて恥ずかしくなった銀時は、顔を真っ赤にして下を向く。

「…俺も、変わるかな…お前みたいに…」

俯いたままそう呟く銀時を見て、前原は笑って頷いた。

「なれるよ。きっと、いや、絶対」

それを聞いた銀時は、今までと比べものにならないくらい明るい笑顔で笑っていた。

数日後、銀時は桂、高杉、前原とよく遊ぶようになった。目は虚ろではなく、死んだ魚のような目になった。

(変わるって、そういう意味で…?)

確かに前よりはマシにはなったよ…ね？

第29章 鬼の子と天人の子（後書き）

愛華蝶「家庭教師ヒットマンリボンの骸好きの皆様、申し訳ありませんでした」

神楽「確かにアレはやバかったアル」

第30章 笑つ門には福来たるって言っけど笑っておたふく風邪とかになった

愛華蝶「あけましておめでとございますー!」

銀時「今年もよろしくだコノヤロー」

神楽「新年早々オリキヤラ登場アルヨ」

第30章 笑う門には福来たるって言うけど笑っておたふく風邪とかになった

銀時が塾に来て、松陽がよく聞くようになった言葉。

「先生、銀時と高杉がまた喧嘩してます」

桂が前原から聞くこの言葉だった。

「またですか」

1日1回は喧嘩をする銀時と高杉。喧嘩するほど仲がいいとは言うが…。

「仲良くしなさい2人とも」

松陽が2人を叱っている様子を桂と前原はいつも襖の陰から覗き見していた。

「懲りないね…あの2人も」

「まあ喧嘩するほど仲がいいって言うし」

「にしてもヒドいでしょう」

呆れながらそんな会話をしていた。

「そう言えば一志、銀時に左目のことバラしたってホント？」

「誰から聞いたの？」

「銀時。一志が天人との混血児って本当かって聞いてきた」

桂に聞かれ、前原は首を縦に振る。

「うん。アイツは信じれるから」

「今まで誰に左目のこと言ったの？」

「小太郎と、高杉と、銀時と、先生」

「それが、一志が信じれる人？」

桂がそう聞くと、一志は思い出したように顔を上げる。

「あ、もう1人いた」

「誰？」

「アイツだよ。いつも1人で部屋の隅っこにいる」

「いたっけ？そんな子」

前原が説明するが、桂はどうしても思い出せない。

「いたよあ。確か名前が……」

「くさかそうすい
久坂蒼瑞」

久坂は、いつも1人でいる、影の薄い子だった。

両親はいるが、酷い虐待を受けているのか、いつも身体は痣だらけ

だった。そのためか、人を恐がっているように見えた。

「一緒に遊ぼう」

久坂が話しかけてきたときは、誰とも話さないと思っていたから驚いたが前原は快く引き受けた。

毎日桂達と一緒にではないときにお手玉やけん玉をやるうちに、あまり笑わなかった久坂にも笑顔が増えていった。

「いつも桂くん達と一緒にいるのに、僕とも遊んでくれるのは何で？」

ある日突然聞かれた質問に対して、前原は即答した。

「そんなの、理由なんてないよ。一緒にいたいからいるんだよ。そうだ。次からは小太郎達とも一緒に遊ぼうよ」

すると、久坂は急に泣き出した。突然の事に戸惑う前原に久坂はこう言った。

「…ありがとう」

何が『ありがとう』なのか、前原には分からなかったが、久坂は前原の『一緒にいたいからいる』という言葉がとても嬉しかったのだ。

「それでその時に左目のことも話したの」

前原の説明が終わる少し前に、銀時達の説教も終わったようだ。 2

人も話に入ってくる。

「アイツも1人だったんだな…」

銀時がそう呟くと、桂がどこかに走っていった。

「小太郎どこ行くの？」

「さあ？」

帰ってきた桂は先ほど話していた久坂を連れて戻ってきた。

「これからは俺たち5人ずっと一緒にいよう」

「え…えつと…」

いきなり連れてこられた久坂は状況がつかめずポカーンとしていた。その久坂に銀時が近寄り、久坂の両頬を引っ張り無理矢理笑い顔を作らせる。

「そんなぼけつとした顔してねーで、もっと笑えよ。笑うだけでも大分違うもんだぜ？この俺が言うんだから間違いないねーって」

「それが出来るように俺らがそばにいてやるよ」

高杉も腕を組んで偉そうにそう言う。

こうして、彼らに新しく仲間が加わり、5人組に増えた。

…彼らが松陽との永久の別れをしたのは、それから1ヶ月後だった

⋮
○

第30章 笑う門には福来たるって言うけど笑っておたふく風邪とかになった

愛華蝶「何かグダグダですいませんでした。あ、言い忘れてたけど、前話からいちの表記を『一志』から『前原』に変えました」

アレン「じゃあいつそのこと、『神田』の表記も『ユウ』に変えましょうよ（黒笑）」

神田「モヤシテメツ!!」

神楽「てゆーかお前ら今ぜんぜん出番ないから意味ないアル」

第31章 人はどうして人を信じないのだろう(前書き)

愛華蝶「幼少期篇、今回で終わりです」

銀時、桂、前原「……………」

愛華蝶「重い空気ですがどうぞ」

第31章 人はどうして人を信じないのだろう

夏頃、松下村塾に2人の侍が来た。

「吉田松陽だな？」

「そうですが、私に何か？」

男の1人が松陽であるということを確認してきた。

「こんな所では何ですからどうぞお入り下さい」

松陽は2人を客室へと促す。

客室へと通された2人が腰を下ろすと、松陽がお茶を持ってきて2人に差し出した。

「かたじけない」

緊迫した空気。音のない部屋。息が詰まりそうになる。

「あの2人誰かな？先生の友達？」

「違いよ。先生の名前聞いてたろ？」

「じゃあ新聞の売り込みとか？」

「そんなバカな」

今日は塾は休み。塾にいたのは松陽と銀時達4人と、家を追い出されて行き場を失い、昨日からここで一緒に住むことになった久坂だった。

襖の陰から部屋の様子を見てひそひそと話す4人だが、その後ろで前原が青ざめた顔で立っていた。

「どうしたのいーくん。具合でも悪いの？」

久坂は銀時達のことをそれぞれ『銀くん』『しーくん』『こーくん』『いーくん』と呼んでいた。

「一志？顔色が悪いぞ。休んでいた方が…」

桂が前原にそう言うと、前原は譫言のように呟いた。

「あいつら…幕府の人間だ…」

「ば…幕府の!?!」

4人全員の声が重なる。

幕府の人間…と言うことは、前原の居場所がここだということ突き止め、連れ戻しに来たのかもしれない。

「では、話を進めましょう」

重い沈黙の中、まず男（仮にコイツを天海てんかいと呼ぼう）が口を開いた。

「申し遅れましたが、我々は幕府の使いの者です。1つあなたに聞きたいことがあって参った」

天海がそう言うと、もう1人の男（仮にコイツを大和やまとと呼ぼう）が口を開く。

「あなたはここで、子供達を相手に基本授業以外に、国の仕組みと剣術、さらには天人の事も分かる範囲のことを教えている。この事

に間違いはないか？」

「ありませんが、それが何か？」

松陽がそう答えると、天海が険しい顔で松陽を見た。

「お前は密かに天人と内通しているという疑いもあるが…この事についてはどう思う？」

「？…それはつまりどういう意味でしょう？」

「つまり貴様は、天人と手を結び、子供達にもそのような教育をさせ、さらには天人と共に幕府を転覆させようとしている、国を裏切るうとしていないか？」

それを聞いた5人は耳を疑った。先生が国を裏切る…？

そんなのデタラメだ。先生は人と天人が仲良くなれないか、この戦争が終わらないか一生懸命考えてただけだ。

それなのに、そんな…。

「そんなのウソだ！！」

「ばっ、バカッ！声がデカイ！」

思わず大声を出してしまった高杉の口を慌てて桂が塞ぎ、5人はその場から足早に立ち去った。

「今のは？」

大和が怪訝そうに聞いてくる。

「ここに住んでいる子供達です。彼らには両親がいないので、私が引き取っているんです」

「そうですか…見苦しいところを聞かれましたな」

「構いませんよ。彼らに隠すつもりはありませんから…」

男達が帰った後、5人が揃って松陽の元に集まってきた。

「先生、アイツ等勘違いしてるよ。先生は国を裏切ったりなんかしないのに！」

久坂の言葉に全員が頷いた。

「心配してくれてありがとう。私は大丈夫ですから」

にっこりと笑って言う松陽だが、天海と大和の報告によって、ある命令が下された。

その日の夜、松陽と一緒に月を見ていた銀時が松陽の膝に頭を乗せ眠ってしまった。

「あ、銀くん寝ちゃった…」

「ちゃんと部屋で寝ないと風邪を引くよ」

久坂と前原がそう言うのと松陽が銀時に自分の羽織をかける。

「銀時は私が見てますから、あなた達は部屋に戻りなさい」

「はぁーい」

「おやすみなさい先生」

4人が部屋に入ったのを見届けると、松陽は満月を見上げながら咳いた。

「銀時…貴方は、これからどんな人生を歩むんでしょうね…」

銀時だけじゃない。

小太郎に晋助、一志に蒼瑞。皆、幸せな人生を歩むだろうか…。

「たくさん仲間にもまれて、笑顔でいてくれますかね」

ギシ…

畳を踏む音が聞こえた。

来たか…。

こうなるだろうとは予想していた。

悔いは無い、と言えば嘘になってしまう。

ズシュツ…

突然、松陽の後ろから近づいた影が、刀で松陽の体を貫いた。刀から滴る血が、寝ている銀時の頬に落ちる。

「ん…」

「…銀時…」

ぼんやりと目を覚ました銀時は、何が起きているのか分からなかった。

「美しく…生きてく…ださ…い…」

松陽の身体が静かに横に倒れる。障子の後ろを見ると、編み笠を被った黒服の大男が立っていた。

その手には、松陽の紅い血で濡れた刀があった。

「先生…？」

銀時が松陽の口元に手を当てるが、既に息をしていない。心臓を一発で貫かれていた。

「先生…先生…」

動かなくなった松陽の身体を揺さぶる。松陽の長い灰色がかつた髪が揺れる。

銀時の目から涙が溢れてきた。ぽたぽたと落ちる涙が松陽の頬を濡らす。

「テメエが…やったのか…」

銀時が俯いたまま黒服の大男に聞いた。立ち上がり、松陽にもらった刀を手に取る。

「テメエが…先生を…」

その目は、怒りと憎しみで満ちていた。

「なるほど…その目、鬼の子と呼ばれるだけはある」

男がぼそりと言った直後、銀時は思い切り斬りかかったが、あっさりと刀を受け止められ、後ろへ弾き飛ばされてしまう。その時に男の刀が銀時の頬をかすめ、血が吹き出す。

「いつつ…」

壁に背を打ちつけた銀時は苦痛に顔を歪める。

「だが所詮は子供。ガキの相手をしている暇などない」

その時、目が覚めたのか、隣の部屋から高杉が出てきた。

「銀時、テメエうるせーぞ。何騒いでやがる…」

目を擦りながらそう言った高杉は、男の存在に気づき、その足下に倒れている松陽を見てこの状況のすべてを理解した。

「チ…目障りなガキがぞろぞろと…」

男はそう言うと、刀をしまい、縁側から外に出てそのまま逃げ去っていった。

「どうしたんだ？」

「何かあったの？」

部屋から目が覚めた桂達が出てきて、部屋を見て啞然とした。

「先生…どうして…！」

前原がそう言うと、高杉が自分の刀を持って縁側に飛び出した。

「説明は後だ！！男が逃げた。アイツを追う！」

「待て！1人じゃ無理だ！俺たちも行く！」

桂も刀を持って高杉の後を追った。それに久坂もついて行く。

「銀時は来ないのか？」

前原は部屋で茫然としている銀時に聞くが、ショックが大きかったらしく、答えようともしない。

仕方なく前原は銀時をおいて高杉達の後を追った。

1人置いてけぼりにされた銀時は、自分の手にある刀を見た。刃が折れてしまっている。

松陽が倒れている場所まで行くと、もう動かなくなった身体を抱き締めて泣いた。

「ごめん…護れなくてごめん…」

護りたかった。何としてでも、護りたかった。でも力が足りなかった。俺じゃあ先生を護れなかった。

「邪魔をする」

玄関の方から聞こえた声が銀時を我に返らせた。

「この声…」

聞き覚えのある声。部屋に入ってきたのは昼間塾に来た2人組、天海と大和だった。

「お前、1人か？」

天海の問いかけにコクンと頷いた銀時を見た大和は、その腕に抱えられている松陽を見た。

「吉田松陽は…死んでいるのか？」

その問いかけにも銀時はコクンと頷いた。

「…お前に言わなければならぬことがある。吉田松陽は幕府に謀反を企てたと判断された。吉田松陽は死罪だったのだが、もう死んでいるならその必要はないな」

それと、と大和が天海の言葉の後に付け加える。

「この塾は不要な施設として焼き払う。必要な荷物をまとめておけ」
「え…塾なくなんの？」

銀時が立ち上がって天海にしがみついてくる。

「ここだけは無くすな！ここが無くなったら、俺達これからどこに住めばいいんだよ！」

「そんな事、知ったことか」

天海が冷たく突き放す。

「反抗するならお前も吉田松陽の手先として殺すまでだ」

外に追い出された銀時の目の前で、塾が真つ赤な炎に包まれていた。銀時の手元には自分と桂達の教科書だけだった。この教科書だけとは、何とか持ち出ししてきたものだった。

燃えさかる炎を見てその場に座り込んでぼろぼろと大粒の涙を流していた。

『屍を食らう鬼が出ると聞いて来てみれば…きみがそう？』

『人に怯え、自分を護るためだけに振るう剣なんて、もう捨てちゃいなさい』

『そいつの本当の使い方を知りたきゃあ、ついて来るといい』

『敵を斬るのではない。弱き己を斬るために』

『己を護るのではない…己の魂を護るために…』

「銀時！」

男を追っていた桂達が帰ってきた。全員息を切らしている。

「煙が見えたから引き返してきてみたんだ…。これは一体どういう事だ」

高杉が聞くが、銀時は黙ったまま俯いていた。だが、銀時が何も言わなくてもみんな分かっていた。

第31章 人はどうして人を信じないのだろう（後書き）

愛華蝶「次話からは攘夷戦争篇です」

銀時、桂、前原「……………」

愛華蝶「…お前ら気持ちは分かるけどさあ、いい加減にしろよ」

高杉「……………」

愛華蝶「何お前まで混ざってんだよ!」

第32章 ちょっと休憩してみましょ（前書き）

神楽「今回のタイトル通り、過去篇はちょっと休憩アル」

桂「おい、愛華蝶はどうした？」

神楽「愛華蝶ならあそこで寝てるアル」

愛華蝶「ZZZ…」

第32章 ちよつと休憩してみましょ

「これが、私の知る前原一志の全てです」

命が前原を幕府に渡すところまで聞いたデビットは、驚きのあまり目を見開いていた。

「へえー、そんな過去持つてる奴と仲いいんだ？お前」

テイキの言葉を無視して命に近寄ったデビットはそのまま命の綺麗な顔を殴り飛ばした。

「ちよつ…!」

「デビ!？」

驚く2人に構わずデビットは命に詰め寄る。

「お前…一志の親を殺したのか？まだガキだった一志の目の前で…お前は何とも思わなかったのかよ!！」

命は殴られた頬をさすりながら立ち上がった。

「分かりませんよ。私はまだ子供でしたから」

「てめえ!」

「はいはい、落ち着けて」

再び殴りかかろうとするデビットをテイキが宥める。

「そんな事より、皆さんに良いお知らせがございます」

突然いつもの明るさを取り戻した命に3人は一瞬ビクツとした。

「今日から今回の計画に手を貸してくれる人たちをご紹介致します。縁 i n g、お連れして下さい」

命がそう言うと、部屋の外で控えていた縁 i n g：じゃなくて、縁が大人数を連れて部屋に入ってきた。数えると10人ほどいた。

「この方々は、真田十勇獅という方々なのですが、この間この中の1人が坂田銀時を暗殺しようとしていたので、仲間の場所を吐かせたついでにリーダーのことも聞き出して連れてきたんです」
「いや、それ連れて来たっつーよりも、連行してきたの方が正しくね？」

縁の説明にツツコミを入れるティキの後からジャステロが聞いてくる。

「でも、お前らは何で坂田銀時を殺そうとしてたんだ？」

その質問に対して、真田十勇獅の中でリーダーっぽい女の人が答えた。

「我々は幕府から命を受け、白夜叉を捜し出して殺せと言われた。調べの結果、坂田銀時が白夜叉であると判明し、殺しに向かったまです。しかしこの金髪の男に『彼は自分達の計画に必要な。彼を殺すのは我々の計画が終わってからでも遅くはない』と言われ、ならばその計画に協力することにした」

「ちなみにこの方が、リーダーの真田幸里さんです」

女、幸里が言い終わつた後、命が付け加える。

「ちなみのちなみに、白夜叉を殺そうとしたのはコッチの猿飛太助だよ」

「テメツ、バラしてんじゃねーよ鎚之助！」

猿飛と呼ばれた男が鎚之助と呼んだ小さな女の子を捕まえようとするが、それより早く鎚之助は逃げてしまう。

「キヤーツ！太助が追っかけてくるー！」

「落ち着け2人とも。騒がしいぞ」

眼鏡をかけた頭の良さそうな男が2人を諫める。

「自己紹介が遅れた。申し訳ない。私は霧隠正蔵だ。あつちで騒いでいるのが猿飛太助と由利鎚之助だ」

丁寧に挨拶をする霧隠はさらに全員の名前も教えてくれた。

「あとのメンバーが、順に笈八蔵、根津甚七、三好赤海入道、三好尼三入道、穴山大介、海野四郎、望月五郎だ。覚えれたか？」

「覚えれるわけねーだろー！！」

思わず耐えきれなくなったデビットが怒鳴る。

「とりあえず！俺はもうこの計画には関わらねーからな！」

「今更何を。もうあなたはこの計画から手を引けませんよ」

そつばを向くデビットに命が苦笑しながら言う。

「あなたはその手で坂本辰馬を襲ったではありませんか。もうあなたは前原一志とは敵も同然なんですよ」
「ッ……！」

『いや…友人が何者かに襲撃を受けてな』

あの襲撃…やっぱり…。

「もう前原一志と分かり合えると思わない方がいいですよ」

分かり合えたはずなのに、彼らの間には確かな亀裂が入っていた。

そして、デビットはまだ気付いていなかった。いるはずのない2人がいないことに……。

第32章 ちょっと休憩してみましょ（後書き）

愛華蝶「攘夷戦争篇は次こそ書き上げます。次話から始まります」

全員「お楽しみに〜！」

第33章 あしたてんきになあれ（前書き）

愛華蝶「攘夷戦争篇スタート！目標はもっさんの出番を増やす！」

陸奥「頭は今まだ入院中ぜよ」

坂本「わざわざ言うんじゃなか！！」

第33章 あしたてんきになあれ

「本当に行くのか？」

和尚が聞くと、銀時はしつかりと頷いた。

「攘夷戦争は今天人の方が圧倒的に優勢じゃ。わざわざ死に行くようなもんじゃぞ」

「構わねえよ。俺らは、先生の為に行くだけだ」

それだけ言い残すと、男達は戦場に赴いた。

攘夷戦争末期。

決着はついたも同然で、天人の圧倒的な力に幕府も弱腰になっていった。

しかしそれでも、天人の力に屈することなく国を憂い、戦おうと剣を振るった。

国を、友を、仲間を護るために…。

「放てエエエ!!!」

かけ声とともに砲弾が降り注ぐ。辺りから聞こえる爆音と叫び声。

「怯むなあああ!!! 一気に押し返せせええ!!!」

高杉が砲弾を身軽にかわし次々と天人を斬り裂いていく。

「危ない！」

誰かが叫んだ途端、近くで爆発がおきて高杉の身体が爆風で飛ばされる。

「無茶をするな馬鹿者」

駆け寄った桂が手を差し出しながら高杉に言う。

「うるせえよバカヅラ」

「ヅラじゃない桂だ」

言い合っていると、2人の後ろから天人が襲いかかってきた。不意をつかれた2人は斬られると覚悟し、咄嗟に目を瞑った。

しかし、2人と天人の間に人が割り込み、天人の腹部を斬り裂いた。

「ガアアア！！」

叫び声をあげて倒れた天人にとどめを刺して、返り血のついた顔で振り返る。

「喧嘩するなら余所でやれ。気を抜くと死ぬぞ」

2人を庇ったのは前原だった。長く伸びた髪を後ろにお団子の形に結わえている。前原の紫色の右目が容赦なく睨んでくる。

「すまない。ありがとうー志」

「それはいいが、銀時と久坂を見てないか？」

桂が礼を言うと前原が聞いてきた。

「一緒じゃなかったのか？」

「途中ではぐれた。散らばって逃げた方がいいと思って」

「見てねえな。銀時はいいが久坂は心配だぞ」

しかしその心配は必要なかった。

日が暮れて攘夷志士達が寢床にしている古寺に帰ると、銀時と久坂がすでに帰ってきていた。

「お前ら無事だったか」

「ああ。何とかな」

銀時が答えた後に辺りを見回してみると、今朝より人数が減っている。

「天人の数は増え、志士の数は減る一方か」

桂がそう呟くと、久坂が元気づけるように言った。

「大丈夫ですよ！きっと勝てます！」

しかし周りからは溜息しか聞こえなかった。

勝てるわけがない…そんな空気も流れ始めていた。

毎日毎日、死臭と鉄分の臭いを嗅ぎながら、体中に血を浴びる。

すぐ隣で仲間が斬られても構っていても自分は殺られる。

今日は、そんな日だった……………。

何も無い焼け野原を見つめる銀時の目は光を失っていた。周りにいる桂や高杉、前原も同じだった。

ついさつき、本当に今の今まで一緒にいた久坂が死んだ。

銀時を庇って……………

銀時が天人に斬られそうになったとき、そばにいた久坂が咄嗟に銀時を突き飛ばして自らが斬られてしまった。

「久坂！！」

銀時が叫ぶと、久坂は銀時を見て笑って言った。

「逃げて。もうすぐここは囲まれる。早くしないとやられちゃう。僕に構わず行って」

「バカ！なに言ってるんだよ！お前を置いていけるか！！」

久坂を担いで走ろうとするが、思うように走れない。

「僕はいいから…早くしないと…」

謔言のようにそう呟いた久坂は、銀時を突き飛ばして自力で立ち上がる。

「うまく逃げてよね…銀くん」

「!…くさ…!」

銀時が久坂に手を伸ばそうとしたとき、目の前に砲弾と銃弾が降り注ぎ、銀時は思わず目と耳を塞ぐ。

目を開くと、久坂は亡骸もなく消えていた。足元を見ると、爆風で飛んできた久坂のはちまきが落ちていた。

『銀くん』

久坂は最期に俺の名を呼んだ。昔から変わらない、子供っぽい呼び方で…。

「久坂…」

先生を護れなかったあの日、誓ったはずなのに…。

銀時は目に涙をためて空を仰いだ。

曇天の空は重くたれ込み、銀時の身体を濡らす雨を降らした。

第33章 あしたてんきになあれ（後書き）

愛華蝶「今回のEDは、悩んだ結果、何部作かに分けようと思う」

ラビ「何でさ？」

愛華蝶「それぞれに合った曲があって、それがバラバラなんだよね」

黛「なるほど…」

愛華蝶「と言うわけで、第1部は序章から第21章まで。曲は福山雅治の『化身』。第2部は第22章から第31章までで、曲は大塚愛の『プラネタリアム』です」

神楽「第3部からはまた後々発表するアルよー」

桂「坂本冬美殿の『また君に恋してる』は出さんのか？」

全員「出すかバカ!!」

第34章 カンタンに人を信じちゃダメ(前書き)

愛華蝶「新連載、迷惑館〜銀魂の間に間に〜。公開中です」

銀時「銀魂オールキャラ勢ぞろいだ」

神楽「みんな絶対見るヨロシ」

第34章 カンタンに人を信じちゃダメ

「ハア…ハア…」

荒い息遣いが聞こえる。

「ハア…ハア…」

目を光らせる天人達の中心には、桂が男と背中合わせで地に膝をついていた。

「……これまでか…」

桂が静かに呟く。

「敵の手に掛かるより…最期は武士らしく…潔く、腹を斬ろう」

そう言った桂の後ろで、男が微かに笑った。

「バカ言ってるじゃねーよ」

「…?」

桂が男の方を見ると、男はゆっくりと立ち上がり、刀を構える。

「…美しく最期を飾り付ける暇があるなら、最後まで、美しく生きようじゃねーか」

ああ…

この男はまだ諦めてはいなかった。

この絶望的な状況でまだ戦おうとしていた。生きようとしていた。

桂は、自分の口元が自然と上がるのを感じた。ゆっくりと立ち上がった桂に、男が言う。

「行くぜ…ツラ」

「ツラじゃない…桂だ」

その男

銀色の髪に血を浴び、

戦場を駆る姿は…まさしく…

夜叉

「まったく、あれほど無茶はするなと言ったのに天人の群集に突っ込むとは…馬鹿か貴様等は…」

何とか天人の群集から逃げ延びた桂が前原に言われた一言。

「と言うか馬鹿だろ」

前原に続いて高杉も罵倒してくる。

「心配をかけてすまないな。しかし、こうして無事に帰って来れたんだから良しとしよ…」

「何が無事に帰って来れたんだから、だ。銀時は意識不明だし、お前だって…」

「わかったわかった。お前はお母さんか」

説教をする前原に溜息混じりに言う。

「しかしそう言う割には貴様等も随分無茶をしたようだな」

桂の言うとおりだった。高杉も前原も身体のいたるところに包帯を巻いていた。

「……………」

高杉はそっぽを向き、前原は下を向く。

「俺の傷は浅い。心配するな」

そう言う前原だったが、動く度に顔をしかめて苦しそうにしている。互いが互いを庇い、自分の事は後回し。ここにいる4人は全員がそうだった。

(皆、同じ…か)

桂がそう思って目を伏せたとき、

カタンッ

微かだが、裏口の方から音がした。人の気配もする。

『俺達以外は皆眠ったはずだったな』

桂が声を小さくして聞いてきたのに対して、前原は黙って頷いた。

「見てくる」

そう言っただけで高杉の様子を見に行こうとしたのを桂が止める。

「いや、俺が行こう」

しかしそう言う桂を前原が止める。

「小太郎を危険な目に遭わせるわけにはいかない。俺が行く」

更にそう言う前原を高杉が止める。

「俺が行くつつつてんだ。邪魔すんな」

「俺が行くと言っているであろう」

「何を言う。危険な目に遭わせるわけにはいかないと言っただろう」

仕方ないので3人で行くことになった。

音がしたのは裏口の扉の向こう、つまり相手はまだ外にいる。扉を開けた途端いきなり襲われるかもしれない。

桂が扉の取っ手に手をかけ、前原と高杉の方を向く。2人が頷いたのを見て、桂は勢い良く扉を開けた。

「何者だ!?!」

しかし、扉の向こうには誰もおらず、虚しく風が吹いた。

「誰もいない……」

「そんなはずは……」

そう言つて3人が下を向くと、いた。

うつ伏せに倒れ、もじかもじやした茶色い天然パーマが風にそよそよと揺られていた。

「……………」

「……………」

「……………」

拍子抜け。

完全に襲いに来た敵だと思い、覚悟して出てみれば人が倒れてた。桂は溜息をつき、前原は天を仰ぎ、高杉は殺意をおぼえた。

「何だコイツ。天人か」

「かもしれん。獣型も多いが、人型の天人も多いからな」

「つーかコイツ生きてんの?死んでんの?」

前原がそう言つと、茶色い天パが「うう……」と呻り、微かに動いた。

「いつそここで殺すか」

刀を抜こうとした高杉を桂が止める。

「いや、天人なら捕虜にして情報を聞き出せるかもしれない」

桂が不気味に笑う。

「殺すのはその後でもよからう…」

2人はその時、桂の背後に『殺』と言う文字を見た。

「いや、フラフラ歩いちゃったらこんな所まで来てしもうたんじや。で？おんしらは何者じゃ？」

茶色い天パ…もう毛玉でいいや。毛玉を椅子に縄でくくりつけた後、3人は目が覚めた毛玉に話を聞いていた。

「テメエこそ何モンだ。天人の手先か、それとも天人に味方する人間か」

少しキレ気味に高杉が聞いた。すると男は笑いながら答えた。

「あはははは！わしや天人の手先でも反攘夷軍のモンでもなかよ。わしもお前等と同じ攘夷志士じゃき」

「何だと!？」

思いがけない言葉に桂は思わず大声を出してしまう。

「声がデカいぜよ。そんなに驚くことがか？」

「すまない。ただ、この辺りの攘夷志士は今日ここに集まっている者達だけだと思っていたからな…」

「わしは土佐の方から来たんじゃ。アツチの陣営は全滅してしもつての。何とか逃げてここまで来たんじゃ」

俯き加減に言う坂本を見て、どこか遠くで仲間が減ったことを理解した。

「なんだ、客か？」

声のした方を向くと、意識不明で寝ていた銀時が壁に背を凭れて立っていた。

「銀時！意識が戻ったんだな！」

「まだ寝てる。傷口が開くぞ。部屋に戻れ」

「へーきだよこれぐらい。それよりソイツは誰だ？」

銀時の身体を心配する桂と高杉の言葉を聞かず、銀時は椅子に縛られた毛玉を指さす。

「名乗るんが遅れたの。わしや坂本辰馬っちゅーもんじゃ」

そう名乗った毛玉…坂本の言葉に、前原は「何！？」と言って驚く。

「いち、知ってんのか」

「聞いたことがある。坂本辰馬…。免許皆伝の剣の使い手で、土佐の方の戦場ではその名を知らない者は無いとか…」

「えー？こんなバカ丸出しが？」

「俺も実際に見た訳じゃないからよくは分からん」

前原の説明が終わると、坂本はにっこりと笑って言った。

「よう知つちゆうのおおんし。謀報担当がか？」

「まあ…そんなところだ…」

生まれ持った異常な記憶力。それを戦に生かした彼の頭には、莫大な情報が詰め込まれていた。

「で？お前はこれからどーすんの？」

銀時が聞くと、坂本はうーんと考え、思いついたことを言う。

「わしを、おんし等の仲間にしちゃあくれんか？」

「な…仲間!？」

「こんな所で会ったのも何かの縁じゃ。それにワシには行くところがないきに。頼む！」

頭を下げる坂本を見た4人は顔を見合わせる。

「…しゃーねーな」

銀時が頭を掻きながら呟く。

「俺は坂田銀時。コツチのチビが高杉で、コツチの長髪がそれぞれツラといちだ」

「誰がチビだ天パ!…俺は高杉晋助だ」

「ツラじゃない、桂小太郎だ」

「前原一志だ。宜しく」

それぞれの名前を聞いた坂本の目が大きく見開かれる。

「坂田銀時、桂小太郎、高杉晋助に前原一志じゃと…!？」

「？そうだけど、何」

様子がおかしい坂本。

「…その男、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿はまさしく夜叉…」
「何それ？ナウシカ的な伝説？」

すると桂が口を出す。

「いや、ナウシカは確か『その者、青き衣を纏いて金色の野に降り立つべし』だろう」

「いやいや、確か『その者青き衣を纏いて荒野に降り立つべし』だろ」

なぜか高杉まで入ってしまった。

「ちげーよ。『その者青き衣を纏いて腐海に降り立つべし』じゃなかったっけ？」

「オイイイイ！！話ずれてっぞオオ！！」

脱線したバカ共を引き戻す前原。

「ちなみにナウシカは小太郎が言った方が正解だ！坂本。さっきのは一体何だ。銀時と関係があるのか？」

「攘夷志士の間じゃあ有名な伝説じゃ。天人だけじゃなく、味方からも恐れられた存在。その名を、白夜叉、坂田銀時。ただの迷信かと思うとつたが、まさか実在しちよつたとは…」

「白夜叉…」

初めて聞く自分の異名。

(白い夜叉…か)

「あとは、優雅に踊るように戦う、狂乱の貴公子、桂小太郎。義勇軍鬼兵隊総督、高杉晋助。謀報の天才、鮮血の策士、前原一志。しかしこんな有名な奴らが集まっちよるとはのお」

こうして、免許皆伝の最強の剣豪、坂本辰馬が仲間に加わった。

しかし彼らは気付いていなかった。

この男によって、これから起こる事態に…。

第34章 カンタンに人を信じちゃダメ(後書き)

九兵衛「そういえば、今日は東城の誕生日だ。プレゼントは何にしよう…」

愛華蝶「カーテンのシャワーってなるヤツでもあげとけば？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1849w/>

D魂 神の使徒と侍

2012年1月14日14時46分発行